

農村司祭の第一次世界大戦「年代記」（1917～18年）
-バイエルン王国フランケン地方のカトリック農村社会-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 立 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12859

【史料紹介】

農村司祭の第一次世界大戦「年代記」 (1917~18年)

— バイエルン王国フランケン地方のカトリック農村社会 —

三 宅 立

はじめに

本稿は、バイエルン王国の北部、フランケン地方のカトリック農村司祭の手に成る、第一次世界大戦「年代記」⁽¹⁾の紹介である。

フランケン地方は、ドイツ帝国北部のプロテスタント地域と南部のカトリック地域の間であって、両宗派の混在する地域として知られる。その東部のオーバーフランケン県（県都バンベルク）は、1905年時点で、プロテスタントが36万2,519名、カトリックが27万1,545名（他に、ユダヤ教徒3,176名、その他および不明460名）で、プロテスタントが多くを占め、南部のミッテルフランケン県（県都ニュールンベルク）では、プロテスタント62万5,050名、カトリック22万7,119名（ユダヤ教徒1万3,675名、その他および不明3,002名）で、プロテスタントがカトリックをはるかに上回っていた。これに対して、西北部のウンターフランケン県（県都ヴェルツブルク）は、カトリック54万6,962名、プロテスタント12万2,028名（ユダヤ教徒は1万2,835名、その他および不明は707名）で、カトリックがプロテスタントを圧倒していた⁽²⁾。

オーバーフランケン県シュタッフエルシュタイン郡は、同県の西端にあり、ウンターフランケン県の東端エーベルン郡と隣り合っている。シュタッフエルシュタイン郡は、圧倒的なカトリック地域で（カトリック1万5,473名、プロテスタント3,541名、ユダヤ教徒47名、その他および不明8名）、同郡の市場町（Markt）エービングも、総人口564名のうち557名がカトリック（残りの7名がプロテスタント）という、カトリックの町だった。

エービングは、1888年の時点ではまだ村（聖堂区教会のある聖堂区村Pfarrdorf）であり、第一次世界大戦中に記されたエービングの「世界大戦年代記」でも「聖堂区村」とあるところから見ても、農村の性格の濃い田舎町だったと考えられる。本稿では、著者に従って、エービングを村と呼び、そのBürgermeisterを村長と訳しておくこととしたい。

三宅 立

年代記の著者ヨーハン・ヴェルフェルが、このエービング^{フフライ}聖堂区の司祭に叙任されたのは、大戦勃発のおよそ1年半後、1916年1月28日のことで、実際に同地に入ったのは同年4月5日、着座の式典が執り行われたのはその4日後、4月9日のことであった⁽³⁾。

ヴェルフェルは、1863年2月9日、ウンターフランケン県エーベルン郡ウンターメルツバハ村に、仕立職親方の子として生まれた。そしてその3日後、近隣のオーバーフランケン県シュタッフエルシュタイン郡カルテンブルン村のカトリック聖堂区教会の司祭に洗礼を受けている。出生地はプロテスタント教会のある村だった。いずれにせよ、彼は、生まれた時からシュタッフエルシュタイン郡と縁があったことになる。

1869年、カルテンブルンの民衆学校（小学校）に入学、76年、バンベルクのラテン語学校に転じ、バンベルク大司教の少年養成所を経て、82年までギムナジウムで学んだ。同年、一年志願兵としてバイエルン第5歩兵連隊（以下では、連隊名のバイエルンを省略する）に入隊、その後バンベルクの司祭養成所を経て、神学校で神学と哲学を学んだ。86年8月12日、大司教により司祭に叙任され、その数日後、ミッテルフランケン県フルト市のウンゼレ・リーベ・フラウ聖堂区の助任司祭となり、司祭を補佐することとなった。そのかわり、中等教育の諸学校で宗教教育にあたり、また、カトリック職人協会の司会司祭、職人会館建設会の副会長、労働者コロニー協会の委員などを務めた。

1893年11月27日、オーバーフランケン県エーバーマンシュタット郡ケーニヒスフェルト村の司祭になり、ここでは新聞紙上で農民層の経済利害の擁護を行っている。次いで99年11月には、同じオーバーフランケン県のフォルヒハイム郡ランゲンゼンデルバハ村の司祭に転じた。1901年、ライフアイゼン信用組合を設立。また、近くのミッテルフランケン県エアランゲン郡マルロフシュタイン村の労働者協会の会長を務め、1913/14年には、ランゲンゼンデルバハ聖堂区教会を改築。ここで彼は、世界大戦の勃発を迎えた。

ヴェルフェルは、1916年初めにエービングに移るまで、この地で司祭を務めた。その年代記の冒頭には、「1914/15/16/17年の世界大戦の年代記 1917年7月19日エービング聖堂区で開始」とあるが、続けてこう記されている⁽⁴⁾。

「世界大戦が農村的な一聖堂区村に反映したさまを記した以下の年代記の筆者は、エービング聖堂区に1916年4月5日、つまり戦争のさなかに着任した。それより先、彼は、以前の聖堂区ランゲンゼンデルバハで開戦の日からその^{ゲマインデ}村の年代記を継続的に書いたが、それは1916年4月1日まで及ぶもので、同地の聖堂区文書保管室に保管されている。

彼は、その日々の報告をエービングでも喜んで続けるところであった。しかし、フォルヒハイム郡の住民と〔エービングのある〕マイン溪谷の住民の間では、思考様式や慣習も、さらに外的な生活様式や内的な感情世界も大きな違いがあり、また、フォルヒハイム郡の住民の生活程度は、シュタッフエルシュタイン郡のそれよりはるかに高いことが分かった。かの地の人々

農村司祭の第一次世界大戦「年代記」(1917～18年)

は、より深い情緒、より大きな献身性、より柔和な心、また、より繊細な生き方をもっている。彼らの戦争への参加は、ここでよりもより密度が濃く、より強力である。それ故、彼は、その新しい^{フアールグマインデ}聖堂区の世界にもっとなじむまで、年代記の続行を中止することとした。そしてついに今日、1917年7月19日にペンを再び執る決心をした」⁶⁹。

したがって、エービングの第一次世界大戦年代記(以下、「エービングの年代記」と略す)は、開戦時ではなく、大戦勃発後ほぼ3年を経た1917年7月19日に書き始められた、大戦後期の記録である。そして、聖堂区文書保管室に保管される「日々の報告」としての「聖堂区」の「年代記」として、私人の「日記」とは異なっている。私が別稿で考察した、バイエルン王国シュヴァーベン県ノイウルム郡ジルハイム村の一民衆学校教師アントン・シュティーゲレの第一次世界大戦日記は、「ジルハイムの年代記」に利用するために書き始められ、じっさい、大戦後に村に寄贈された手書きの『ジルハイム 1914-1918』の第1部「銃後の年代記」にあたるものであった⁶⁹。これは、その序言で「日記」と明記しているとはいえ、村の年代記を当初から意識していた点で、これまた——一少女ヨー・ミハリの第一次世界大戦日記⁷⁰のような——全くの私人の日記とは性格を異にしているといえよう。

この「エービングの年代記」が、『エービングの戦時年代記：農村司祭ヨーハン・ヴェルフェル(1863-1929)の手記』として公刊されたのは、1999年のことであった。これには、バンベルク大司教区文書館長ウルバーン博士の序文、同館員ケルナーの手に成る伝記と年代記への注記が付され、数多くの写真やエービング出身兵士一覧も載っている。

ウルバーンの序言によれば、バンベルクの司教座聖堂参事会員フランツ・ゼラフ・アハトマン(1851-1915)は、大司教区庁の1914年8月20日の呼びかけをこう締めくくっていたという。「あらゆる聖堂区年代記が、この比類なく偉大な時代にふさわしいものであらんことを。戦争の年1914年に、羊飼いと羊の群が、信仰、神への信頼、かくも多くの敵の襲撃に抗する勇氣、そして、神が我々によかれと課した試練である戦争がもたらしたあらゆる苦しみ、あらゆる苦難、あらゆる悲惨をやわらげる活動的な愛において団結していたことを、後世の人々に語るものであらんことを」⁶⁹。

先述のように、ヴェルフェルの序言によれば彼が前任地で戦時年代記を記し始めたのは開戦の日のことだったから、この呼びかけに先立っていたことになる。それは未見のため判断し難いが、「エービングの年代記」に関する限り、その内容から見て、シュティーゲレの日記／年代記とは異なり、「後世の人々」はともあれ少なくとも当面は、村人の目に触れることなく聖堂区文書保管室に眠るはずのものだったように思われる。

この年代記では、ウルバーンが序言で指摘しているように、「現場の日常史、基底における生活と経験」が多様・多彩に描き出されている。それは、しかし、「司祭の視角から」描かれたものであり、「住民の声、^{クライネ・ロイテ}庶民の意見」などによって「訂正・補完し、完全なものとする」

ことが求められようが、そうした文書史料はほとんどないように思われる、とウルバーンは続けている⁽⁹⁾。

しかし、まさに「司祭の視角」から描き出されたこの年代記は、民衆学校教師の日記／年代記（上述）と突き合わせるとき、その類似性と相違との双方が際立って感じられ、そしてその双方において、戦時下の農村生活にきわめて重要な光を投げかけてくれるものとなっている。教師と司祭とは、共にしばしば農村の指導層の一角を占め、また、しばしば——とりわけ聖職者による学校教育の監督をめぐる——対立関係にあった⁽¹⁰⁾。

以下、今後の考察の素材として、「時に荒っぽい (derb)」(ウルバーン) この年代記をできる限り原文に沿って紹介することとしたい。その際、「」を付したのは原文をそのまま訳出したものである。〔…〕は訳者による中略を示す。なお、刊本には、編者による小見出しが〔 〕を付して付けられており、本稿でもそれを踏襲した。また、白抜きの大きなイタリック体の活字で見出しが付いているが、これも編者によるものと思われるので、〔 〕を付して示した。〔 〕内は、すべて編者によるもの。ただし、編者の注記などにあるものを本文中に〔 〕を付して補った場合も多い。他方、〔 〕内、また、1字分下げた部分は、訳者による補注ないし注釈である。なお、あまりに長いと思われる段落については、適宜、改行を施した。先に紹介した年代記冒頭の部分は、[プロローグ]という小見出しが付されており、それは、「初めに、戦争がエービングで生み出した状態の叙述を行おう」と結ばれている。そしてこれに「[1917年]」という小見出しと大きな白抜きの斜体の活字の「厭戦と闇取引」が続くが、この箇所も7月19日の執筆部分であり、そこでは、総括的な叙述がなされている。

「1914/15/16/17年の世界大戦の年代記

1917年7月19日エービング聖堂区で開始」(27)

[プロローグ] 「世界大戦が農村的な一聖堂区村に反映したさま〔以下、上記〕」(28)

[1917年]

[厭戦と闇取引]

「〔エービングで〕召集されたのは、開戦以降今日1917年7月19日までに全部で78名である。エービングは、戦前約535名を数えるのみだったから、住民に大きな穴がぱっくりあいたことは、容易に理解される。さらに、その女性部分が数の上ではるかに凌駕しているだけでなく、労働と仕事の獅子の分け前が彼女たちにかかっていることも。婦人、乙女、子供、老人がなしていることは、全時代を通して賞賛され続けよう。とりわけ、労働への意欲と喜び、忍耐と毅然さが、神への信頼と結びついて、あらゆる逆方向の諸影響にもかかわらず、くりかえし優勢を維持しているのであるから。

エービング村が祖国に死の犠牲を捧げたのは、今日まで12名である。独身が10名、妻帯者が2名、内9名は敵地にあり続け、2名は、その運命が不明で、永遠に行方不明とされており、1名は、出征の結果肺結核になり、銃後で死んだ。死者の中には、2組の兄弟がいる。英雄の名は、聖堂区の死者名簿にあり、そこには彼らの、さらに知るに値する状況に関する情報も含まれている。ところで、エービングの軍服を

着た戦士たちが、全員、またいつも、かなたの敵地、さらには前線に滞在していたと考えるのは、誤りであろう。否、かなりの部分、しばしばその四分の一が休暇でくんに帰ってきている。というのは、前線は、ほとんどみなによって地獄のように恐れられているからである。大半の者にとっては、〔銃後の〕守備隊で2～3日うろつきまわり、次いで再び14日間の休暇を得ることが一番であり、じっさいそれを得ようと努めたのであった。それは、お金がかからないドイツ帝国の軍服と長靴で動き回ることができ、鉄道の旅を楽しみ、休暇中は日に2マルクを軍の金庫から受け取るという利益を彼らにもたらした。その上、〔出征〕家族手当がさらに流れ込み、それはかなりの家族にはとても多額であった。したがって、軍服を着た戦争の英雄であることは、ともかく我慢できる商売だったのである。

この状態、ないし不都合な事態のさらなる結果は、毎日、奇妙な、しばしばいんちきじみた理由付けで休暇、とくに前線からの休暇の請願が出されたことである。というのは、じっさいのところ、守備隊にいる者は、守備隊でよりも、より多く家でうろつきまわっていた〔ので特に帰郷の休暇をもらう必要がない〕からである。これに反して、1915年以降、祖国の防衛と救済のために前線に出ようという請願は一つもなかったというのが、真実に合致しているといえよう。戦争は、農村住民をもだめにし、物質主義の精神をたっぷり浸み込ませた。金銭欲やもうけ欲が凱歌を奏し、不法精神がはびこった。たとえば、ごくわずかな人々だけしか、厳罰で脅されている食料品の最高価格のことなど気にかけていない。ほとんど誰もゲマインデ連合への食料品供出の義務に従っていない。それだけいっそう、密輸〔ここでは闇売りと言ったところか〕と〔闇での〕買出し行為が栄えている。居酒屋で聞かれるのは、ただいわゆる「お偉方(die Großen)」への不毛な誹謗だけである。お偉方というのは、贅沢三昧の暮らしをする役人や金持ちで、彼らは途方もないもうけをポケットに入れ、戦争を金儲けに悪用している連中のこと。戦争は「いんちき」とされる。しかし一番声高に叫ぶのは、供出規定に違反してお偉方に暴利価格で食料品を納入する者たちである。こうしたわめき屋は、それによって自分の良心をなだめようとしているのだ。

司祭はその聖堂区民に対して困難な状況にある。教会や世俗の当局からは、人々にその義務をきつくい聞かせるよう迫られる。もしそうすれば、聖堂区民は彼に対していきり立ち、彼を、農民を抑圧しようとする農民層の敵と呼び、悪魔に引き立てられてしまえということになる。長く続く戦争は、真にキリスト教的な精神が、農村住民の大部分の心はもとより、皮膚をも貫いていないこと、信仰者と不信仰者の、行為・行動、思考、努力の間に、少なくともドイツでは、顕著な相違がないことの証左を提供している。そしてここドイツでは、教養層の「理想主義」もまた、この、精神の試練と選別のおそるべき時代において、みじめにも挫折したのである。

戦前とても信心深かった後備兵で、4児の父親の、有能な実業家は、戦争ですっかり変ってしまい、ベルギーの占領地域で将校や役人の生活を見て、司祭の叱責に答えて言う。

「いったい、わが教養層の文化や理想主義、教養や英知とは何なのか？ それは、彼らが、次のことを知っており、それにしたがって生きているということなのだ。(1) 10マルクは3マルクよりも多い。(2) 雉の焼肉は、かさかさした古い軍隊パンよりもよい。(3) 五人もの子供を育てるのは、二人の子供を育てる、ないしは全く育てないよりもかかりがする。(4) 17歳の女の子は、70歳の奥さんより気持ちがいい。(5) 他人を働かせたり、戦わせたりするのは、自分が働いたり戦うのより快適である、ということがそれである。そしてこうしたことを知り、また分かるようになるのに、9年間のギムナジウム教育、または6年間の実科ないし教員養成教育、それにさらに4年間の大学教育が必要だというのである。そんなことは、黒人やグルカ人の方がもっとよく知っている。」

この男は、彼が経験からかちえたその見解を堅持し、自分は誰からも、司祭からですら、もう少しもだまされない、と宣言した。

ドイツ国民の将来の内になお隠されている暗く苦いものに、教養層は重大な責任がある。その不毛の物質主義、その不信仰、その心の荒廃によって、彼らは、ドイツ国民の心を毒し、真の文化に重大な損害を与えたのである。」(29ff.)

エービングの年代記は、このように始まっている。ここには、すでに、食糧統制経済下での村人たちの「金銭欲」「もうけ欲」「不法精神」への批判的立場と、「教会や世俗の当局」と「ゲマインデ」（村人たち聖堂区民）との間に立たされた村の司祭の困難な立場が明示されている。この点では、先に触れた、ジルハイム村の民衆学校教師の立場と共通するところが多いといえよう。しかし、それと同時に、この司祭の「教養層」への反感がきわめて顕著であったことも、注目に値するものといえよう。

以下、一応の時期区分として、〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕に分け、その各時期の中心ないし特徴的なテーマとなっていると思われるものを標題として付すことにする。

〔Ⅰ〕 統制経済・闇取引とフランス人捕虜

〔1917年の穀物の取り入れ〕〈7月21日〉「ベルリンでは、4日前、帝国宰相ベートマン＝ホルヴェークが退陣した。彼の地位は、左右のとげとげしい攻撃でもはや保てなくなったからである。ミヒャエーリス博士がその跡を襲った。帝国議会は、かなり長く逡巡したのち、結局、新しい、第7次の戦時信用150億〔マルク〕に同意した。

エービングの人々は、この重要な行動に特に注目しなかった。彼らは、取り入れにかかりきりだった。収穫は、今年はそれほどよくない。ライ麦は、主要パン穀物であるが、実りは満足できるとはいえ、麦わらの量はそれほど多くなかった。小麦のできは中程度か少なかった。大麦とカラス麦は、全くできが悪い。多くの畑では、穂は、成長が遅れた茎からほとんど出なかった。それに、実りの貧しさ。

それは、畑をからからにし、成長を奪った、2ヶ月にわたる旱魃のせいである。採草地は、7月の半ば、毛を刈られたろばの皮膚のようだった。ジャガイモ畑は、まだ青かったが、実をつけるのはごく難しかった。人々は夏の盛りに、家畜の餌として干草と麦わらを与えることを余儀なくされた。

しかし、天気よくなったおかげで、穀物の取り入れはきわめてうまくいき、濡れなくて済んだ。それによってよいパンが期待されているが、それももっともである。

当局は、ライ麦と大麦の早期脱穀を指示し、8月15日までにライ麦を供出した者には、1ツェントナー〔=50キロ〕あたり3マルクの割り増し金を保証した。エービングの人々は、今日、7月21日まで、早期脱穀を開始していない。しかし、飢餓配給しか与えられていないドイツ国民は、8月15日から、それよりもより良い質のものを供給されることになっている新しいパンを、待ち焦がれている。古い穀物が足りるのは、まさにこの日までなのであった。」(31f.)

〔守護聖人祭と教会開基祭〕〈7月25日〉「今日は聖堂区教会の守護聖人、聖大ヤコブの祭式が古来の華やかさで祝われた。1871年に信心深い二人の未婚の老女、マリアンネ・ラントグラフ〔1801-1875〕とマルグレータ・シュトラウリーノ〔1827-1896〕が、500グルデン=857マルク86ペニヒの寄進を、その利子をその時々司祭が受け取るようにとの目的で行った。司祭はその代わりに、祭の前夜によそから若干名の聖職者を聴罪のために、また、祭の当日の説教と盛式ミサ、それに聖体拝受のために、呼ばなければならなかった。祭は、7月25日の当日におこなわなければならない、日曜に日をずらしてはならない、というのが寄進の条件でもあった。

1917年の聖ヤコブの日〔水〕には、祭の説教は〔ミッテルフランケン県ヘルスブルック郡の都市制度をもった市場町〕シュナイッタハの市司祭カール・ブレーム〔1874-1930〕が、盛式ミサは〔シュタッフエルシュタイン郡の市場町〕ラッテルスドルフの司祭マイクスナー〔1849-1924〕が執り行った。〔ヴェルフェルの前任地の村〕ランゲンゼンデルバハの司祭エンメルト〔1871-1925〕と〔オーバーフランケン県バンベルクI郡の市場町〕プッテンハイムの聖職祿受領者ヘンネマン〔1880-1925〕は、奉仕を行った。〔シュタッフエルシュタイン郡の村〕メードリッツの〔助任司祭〕クーラト・プフュッファー氏も出席した。み

な、この地の司祭 [ヴェルフェル] のよき友であった。

祭は、好天にめぐまれ、とても心を高めるものとなった。[バンベルク] 大司教区で最も美しく豪華だとされている行列^{プロヴェンション}には、4名のフランス人捕虜も参加した。同様に農民のもとで働いている他の10名は、参加しなかった。

真に美しく荘厳な祭の参加者のかなりの者には、ドイツには悪い暗い未来が近づいており、こうした壮麗な、しかしまた費用のかかる祭は不可能になるという不安な予感がした。

司祭には、この祭式は、費用が高くついた。そして、多くのよそからの聖職者のもてなしと、その困難さのために、かなり苦慮した。というのは、あまり考えないが、それだけいっそう意地の悪い民衆に、けちで、かねに細かいという評判をとりたくなかったし、といってまた、その聖堂区民^{フョルク}にはわずらわしい当局の指示を守るよう忠告するが、自分はそれを無視するという悪い評判も、手に入れたくなかったからである。したがって、司祭は、もてなしに必要とされるすべてのものを、ひそかに隠れて調達しなければならなかった。菓子を焼くための小麦粉は、彼の甥で機転の利く学生 [父親はオーストリアのパート・ハルで大きな果樹園を有していたが、子供が10名という子沢山で、13歳の時から代父でもあった叔父のところまで育てられ、当時はギムナジウムの学生だったハンス・ヴェルフェル (1902-1944)] が暗闇にまぎれて [ウンターフランケン県エーベルン郡の市場町] バウナハの製粉所からもってきた。もっとも、値段は高かったが。牡牛の肉と子牛の焼肉は、よく知っている [オーバーフランケン県ヘヒシュタット郡の村] ポマースフェルデルンの食肉職親方エーガーが供給してくれた。彼は前夜、これら守護聖人祭の必需品を彼の息子に旅行用商品見本入れ鞆でもたせてくれ、しかも正規の最高価格しか求めなかった。ラッテルスドルフの司祭は、大司教区全体で焼きソーセージの熱狂的な愛好者として知られており (それゆえ彼は「ソーセージ・ハイナー」としか呼ばれていない)、焼きソーセージ抜きの祭は彼の場合全く考えられなかった。このことは、エービングの司祭の頭をいささか悩ますこととなった。エービングの一農民がその窮地を救ってくれた。夜陰にまぎれて、この口の堅い男は、豚1匹を手ずからほふり、25ポンドの肉を司祭に与えてくれた。司祭は、これで最良の焼きソーセージを5ダース作らせた。客の司祭たちは、午後、いいにおいのする焼きソーセージの入った深皿がテーブルを飾っているのを見た時、恍惚状態に陥った。じっさいまた、ほとんど全く残らなかった。ああ、神よ、彼らがこうした珍味を楽しむことができたのは、もう長いことなかったし、将来もこうした楽しみはほとんどありそうもなかったのです。

祭の際、特に豪華な行列の時に、くりかえし意地悪い警告者のように戦争のことを思い出させるのは、教会の塔の、不完全でもった音のする鐘の音である。そこには、大きい方の二つの鐘しかもうない。小さい方の二つの鐘は、6月25日にその姉妹たちに別れを告げた。当局がそれらを差し押さえ、押収した。祖国が弾薬の製造に必要な銅や錫の不足に悩んでいるからである。そして、6月25日には、上記の小さい方の二つの鐘、一つは1764年製で重さ220キロ、もう一つの「貧しき心の鐘」は重さ110キロで、1898年製造、したがって19歳になるのが、取り外され、塔から墓地へと下に落とされた。このために運ばれたわらの山の上に落ちたので、少しも損傷することなく、高いところからの墜落に耐えた。帝国は、二つの鐘の補償として、[教会] 基金^{シュティフトツング}に1,485マルク、つまり、キロ当たり4マルク50ペニヒ払った。二つの鐘の犠牲は、住民の心と神経にとってもこたえた。というのは、鐘塔の響きは農村住民の生活の一部をなしているからである。

神よ、荒れ狂い続ける戦争が最後の二つの鐘をもさらに呑み込むことを防ぎ給わんことを。」(32 ff.)

ここには、統制経済に関する当局の指示に従うよう説教しているヴェルフェルが、自ら法の網の目をかいくぐって、肉類や小麦粉の調達に努めたことが率直に記されていて興味深い。また、こうして教会の守護聖人祭は、戦時にもかかわらず、ともかく豪華に執り行われたが、小さな鐘の音は聞こえず、次に見る教会開基祭は、もっと寂しいものとなった。なお、この時残った二つの鐘にも、後に押収の危機が迫り、村内は大騒ぎとなる。教会の鐘の音は、村

人の生活に大きな意味をもっていたのであった。

〈7月29日〉「今日は教会開基祭が祝われることとなっていた。教会堂の壁内でのみ執り行われた。かくも多くの男性・若者が戦争で遠く離れていることが、特に今日は人々に重くのしかかっている、人々の心をいっそう暗いものとしていた。それに、焼け付くような暑さが、畑や採草地の最後の青い莖を焦がしている。」(35)

〔ついに雨〕 〈8月2日〉「ついに7月29日夜10時に、雷鳴の強い轟きとぎらぎらした稲妻が、待たれていた雨の接近を告げた。雨は1時間半降り続き、かわききった畑に生氣を与えた。7月30日、月曜の夜も同様で、8月1日もそれに劣らなかった。8月1日から2日にかけての夜には、6時間も降り、すべてをびしょびしょにした。

長く続く暑さで不安にかられていた農村住民の喜びは度外れのもので、そのため戦争第3年に入ったことは忘れてしまった。ようやく徐々に、この恐るべき事実に人々は気がついた。生活でのたくさんの欠乏や、多くの大事な人とさらに一年もの間離れていることが、ドイツの国民と帝国を苦しめ、忍耐の限りまで試練にさらす、という思い、そして、帝国の債務が無限に増大し、最もうまくいっても戦争の償金を得る見込みがとてもないことから、戦後負担が恐るべく増大し、それによって国内の混乱と民衆の怒りの爆発が生み出されるかもしれないという、根拠のある怖れ——これらが思考する人々を非常に暗い気分させ、眉間にしわを寄せさせた。幸せなことに、たいていの人は、ただ瞬間的な生活をし、真剣な思索に敵対している。その他の点では、かねと、ヒンデンブルクと、自分自身を頼りにしているのである。」(35)

バイエルン陸軍省にあてた1917年10月8日付の第一軍管区の報告によれば、併合主義の宣伝が、併合の達成と戦時公債の安全性との関係を確立するのに十分有効に機能した結果、「わが国が償金をかちえなければ、自分たちのかねは失われてしまう」という確信を、〔1917年7月19日の〕帝国議会の平和決議や平和主義的宣伝が目覚めさせることになったという⁽⁴¹⁾。上記の「根拠のある怖れ」を生み出すのにも、「併合主義の宣伝」の果たした力は大きかったと考えられる。

〈8月8日〉「雨、雨が7月30日から今日まで毎日の合言葉だった。沢山の穀物〔ここではライ麦〕、小麦、カラス麦、大麦が畑で〔穂上〕発芽し、使い物にならなくなり、あるいは、家畜の餌として利用するしかなくなった。そこに神の摂理の定めを見る人々もいた。というのは、ベルリンの食糧庁は、帝国のあらゆる穀粒を小さなものまで「差し押さえ」、人間の食糧にあてようという暗黒計画を案出していたからである。しかし、彼ら動物たちの天なる父は、彼らを給養して下さった。これらのもののことを、食糧庁は考えていなかったのである。8月6日、ついにエービングで早期脱穀が始まった。ライ麦の穀粒のでき具合が讚えられた。

〔戦時献金〕 日曜日、8月5日は、ドイツ帝国全体で、戦争三年目を厳粛に迎えるために、犠牲の日が催され、エービングの三人の乙女、村長の娘マリーア・シュナイダーパンガー、レンガ積み親方の娘マリーア・メルツパハー、パウアー（Bauer〔大農ないし中農の上層、あるいは一般に農民〕）の娘マリー・シェーバーが、家々を回って寄付を集めた。成果は98マルクで、エービングにとっては、6月に潜水艦乗組員のため197マルクを寄付したばかりの住民の、福祉意識のすばらしい証左である。民衆は、犠牲として差し出された献金の獅子の分け前が「教養層」のふところに入ってしまうということを広く確信しており、彼ら教養層がドイツ「理想主義」と呼んでいる不毛な物質主義がその間で支配していることから、そのこ

とは信じうるところなのだが、それだけいっそう、民衆のこうした献金意欲は高く評価されるべきなのである。粗野な感情と教養とは手に手を携えている。そして、ほとんどすべての兵士が、この〔教養〕層の物欲、不誠実さ、豪勢な宴会、粗野さについての全くけしからぬ話を語ることができる。指導層のわずかな成員だけが例外をなしている。諸々の事の関連を知り、世界史からより深い知識を得ている者は、悪の治癒は考えられないということを容易に認識するのである。」(36)

〔「闇取引」が栄える〕〈8月15日(水)〉「マリア昇天の日の祭が祝われた。祭では、エーピングの人々の天にまします王妃への純正なカトリック的愛が、まっぴかりのもとに示された。子供たちは、古来のしきたり通り花と植物でできた束——そのどれにも、はしばみの実、南国風の堅果、よもぎ、待宵草は欠けていなかった——を教会にもってき、それを教会堂の南の外壁においた。司祭は、ミサの侍者とともに、説教に先立って外に出、聖別を執り行った。

説教の中で〔…〕、司祭は、宗教と世俗双方のお上に対する服従にまさに取り立てて友好的ではない自分の子羊たちに、服従の義務に心を配るよう促した。というのは、当局に対する反抗や「お偉方」に対する扇動的な言辞が日常茶飯事となっていたからである。特に〔市場町〕ラッテルスドルフでは、農家が牛乳やバターや卵の割り当てられた量を供出しようとせず、みえすいた遁辞を弄している。彼らはそのかわりに闇取引・密輸取引を最大限行っており、都市の軍需品納入業者諸氏の例にならって、全く著しい額の代金を払わせている。郡庁の訓戒や警告はすべて空しかった。そこで、郡庁は、まず、主要な暴利者のバター攪拌樽(バター製造機)を地方警察に押収させた。ぶつぶつ声や叫び声が村全体に広がった。一番声高だったのは、特に良心にやましきのある女性や男性だった。義務に従ってお上への服従を求めた町長にも、人々の憎しみは向けられた。しかし、何事にもだんまりを決め込み、物事を成り行きに任せた司祭には向かわなかった。町長は事を深刻に受け止めたあまり、病気になり、3ヶ月職務を免除された。郡長は、今やより厳格な態度に出た。〔…〕新しい特に厳しい地方警察官をラッテルスドルフに送り込み、ラッテルスドルフの風儀にいささか伝染した老巡査によって鈍くなったサーベルを幾分か鋭くし研ぎ澄まそうとした。すべてのバター機械の差し押さえと押収、自家消費の撤回の威嚇が続いた。今やラッテルスドルフのわめき屋たちはいささかおとなしくなった。司祭すらも、今や説教壇から、人々に供出の義務を想起させ、センセーションを引き起こした。

エーピングでも、軽い恐怖が反抗的分子の体を走った。というのは、裁判所の介入の危険が迫ったからであり、農民は元々若干の臆病さを抱えているので、それに恐れをなしたのである。わずらわしい司祭〔ヴェルフェル〕への悪口雑言も少し減少した。〔…〕」(37f.)

一般の農家でのバター製造の禁止、バター攪拌樽の押収は、あのジルハイム村でも、1917年3月の「女たちの小さな革命」(シュティーゲレの日記)の発端となっている。戦時統制経済への反発は、同様の事態を各地で生んでいたことになる。

〈8月29日〉「エーピングのレンガ積み親方の息子、神学博士候補の歩兵ヨーゼフ・メルツバハー[1893-1946]上級兵が休暇で帰郷している。休暇は12日間だけ。1914年の開戦後に寄宿制神学校から召集され、〔…〕1914/15年の冬に戦場に赴き、病気も負傷もせず今日まで耐え抜いている。〔…〕この控え目な神学生は、運命に甘んじ、戦場での糧食についても、上官についても、嘆くことがない。これは、その他の従軍者の態度とはあまりに著しい対照をなしていて、とてもよい影響を与えた。

同じ時に、34歳の歩兵、パウアーの独身の息子シュナップが休暇で滞在した。彼は、前線で著しい働きをし、剣付き功労賞で表彰された、まったき意味での英雄である。この農民も神学者も、ふたりとも、休暇中、寡黙だった。薄暗い真摯さが彼らの性格に刻み込まれている。ああ、神よ、これらの若者は、いかにおそるべき犠牲を祖国に捧げなければならなかったことか！ 彼らは、義務を果たす中でそれを余儀なくされたのだが、嘆くことも不平を言うこともない。それにひきかえ、多くの、故郷に留まった、特に

女たちのふるまいは、全くこれとは異なっている。金銭欲ともうけ欲が、彼女たちを醜いハルピュイア〔ギリシア神話の、頭部は女で鳥の爪と翼をもち、災いをもたらす怪物〕、炎を吹く竜に変えてしまった。彼女たちは、ゲマインデ連合への牛乳をバンベルク市に供出することを、1リットル22ペニヒという価格が彼女たちには低すぎたので拒否した。彼女たちは、バターを製造し、それを「お偉方」にひどい価格で売って暴利を得ているが、そのお偉方たちの野卑な悪口を言うのである。同じ事を卵でもしている。一番卑劣にふるまうのは、子供のいない女性たちである。すでに6月に委員会の実見で必要不可欠ではないとされ差し押さえられた家畜が、自発的な供出の見込みがないので、ついに8月に厩舎から連行されるようになった時、若干の者は、フリアイ〔ギリシア神話の復讐の女神〕のようにふるまい、悪口雑言の洪水のもとで、厩舎に再び立ち入ろうとする者はみな堆肥用フォークで突き刺すと脅した。司祭でも例外とはしない、と。しかし司祭〔ヴェルフェル〕は用心して、毒菌以外の菌をすべてなくしているご婦人の方のこうしたお飾りに近づくことはしなかった。

同様に激怒の態度を示したのは、フランス人捕虜にほれ込んでいたと疑われてももっともな、若干の女たちだった。彼女たちは、彼らと公然とごく親密につきあい、車でもたれ合って畑に行き、一つ皿から食べ、こうした女の一人は、自分のフランス人の魂の平安を案じて彼と巡礼に行きもする。彼女たちは、それを最も神聖な日にしたのだが、夜起こったことで、我々は黙っていることにしよう。天地創造の日々以来、夜は寡黙でその秘密をもらさないものだから。フランスでのフランス人のドイツ人捕虜に対する態度を知っている真摯なドイツの男ならだれもが、かくも多くのドイツの婦人や乙女のこうしたふるまいに、恥ずかしさのあまり顔が赤くなった。その弁明となるのは、ただ、(1)健全なドイツ人男性の多年にわたる不在とそこから来る性交の不可能性：「自然ハ、全力デ追イ払ウコトハデキルガ、ソレハクリカエシ戻テクル〔ラテン語〕」。(2)捕虜に労働させる切羽詰った状況。それによって自然に長く一緒にいることになる。

〔「統一ビール」の導入〕 1917年8月15日から、バイエルン王国ではいわゆる統一ビールが規定に従って供されることになった。これはとてもよい色をした3~4%（原麦汁エキス）の軽い飲み物で、本当のビールとは名前以外は同じではなく、農村では26ペニヒ、都市では出すところによって28~40ペニヒする。いかに酒飲みが、絶望的な諦念をもってこの代物を飲み下し、ため息すら人に聞かさない様は、お笑いだった。

ついでに言えば、「酩酊」という言葉は、この悲しい時代にドイツ国民の日常語や記憶から消え、以前は自身健全な居酒屋生活の友、よき滴の愛好者であった司祭たちは、説教壇でアルコールの濫用を弾劾するという離れ業を演じることを免除されることになった。〔…〕(39ff.)

シュティーゲレの日記では、統制経済への女性の不満や反抗は、主として台所用品と関わって登場したが、この年代記では、むしろ女性が統制経済への反抗の主役をなしている感がある。これは、二つの村の間の相違を反映しているのか、それとも、一般に女性に厳しい視線を向けるこの司祭の偏見によるのか、あるいはそうした彼にして初めて現実をリアルに表現し得たのかは、問題として指摘するにとどめざるをえない。

〈9月8日〉「日曜日、9月2日、たそがれ時に、ざーざー降りの雨、しかし、その後続いたのは晴れた秋空で、雲ひとつない空が青く澄み、これは天からの農民への贈り物。とてもたっぷりした二番草の干草の刈り入れが期待され、秋の農作物の生育が見られた。

それだけいっそう、規定に反して密輸〔闇取引〕される食料品の暴利価格は上がった。農民はもう、25~40ペニヒ以下では卵を与えず、3~4マルク以下ではバター1ポンドを与えない。枝にたわわになっている果物も同様である。都市や農村の人々は、その財布をしっかりと握っている。司祭はそれで困ってい

る。というのは、奇妙なことに、人々は以前よりもびた一文多く彼に払おうとしない。否、彼らはできる限り料金をさらに差し引こうとするのである。[…]

【国王来たる！】木曜日、9月6日、午前10時45分、国王ルートヴィヒ3世が、公式のフランケン地方の旅(ゆっくり歩くことになっていた)で、エービング駅を通過した。当局の指示で、司祭と村長、学童、村当局、また、消防団や退役軍人会(Veteranenverein)や在郷軍人会(Kriegerverein)のように国王が最高位の後援者になっている諸協会は、駅の表敬場所に来よう招請された。しかし、学童と教師や村長のほかには——学童も若干の子供は欠けていたが——誰も現れなかった。ルートヴィヒと勲章を帯びた司祭と村長は、国父に対する人々のこうした無関心に非常に怒った。しかし、彼らの怒りは、全く物質的なものに埋没した住民には効き目がなかった。」(41f.)

〈9月16日(日)〉「バター、卵、肉、果物やその他の食料品の最高価格の非合法的な超過はとどまることを知らない。司祭も聖堂区民に対して、バター1ポンドに法定の1マルク80ペニヒではなく、3マルク払っている。さもないとバターを得ることができない。それでいて、お偉方の生きる喜びに対する悪罵はますます激しくなっている。農民が、お偉方に最高価格以上で不法に販売することで、彼らの生きる喜びを支えているということは、農民の誰も考えはしない。都市民はこれに対して、農民が都市で購入する品物に全く猛烈な価格をつけて相殺する、ということについても。

【前線からの死の知らせ】二番草の取り入れでは子供、女性、老人が全く驚くべき働きをした。日曜にも休まなかった。平和への希求がますます深く心をとらえたことは、何の不思議もない。重労働に、さらに、遠くの地の愛する人への心配が加わるのだから。しかし、全能の世界の導き手は、人間をととてもきつい訓練にさらす。平和について多くが語られ、新聞ではさらに多く書かれるが、熱く希求されるものは、来ようとはしない。逆に、戦争は新しい犠牲を求める。土曜日、9月15日、衛生兵[ヨーハン・]シュナイダヴィント[1888-1918]の家族あての葉書が、悲報をもたらした。エービング出身の第8歩兵連隊第7中隊歩兵ヨーゼフ・ドゥゾルト[1888-1917]がリガ攻撃戦で9月1日に戦死したとのこと。[…]

ドゥゾルトは、兵役を済ませた兵士ではなく、戦争の経過の中ではじめて召集されたが、戦地勤務には不適として、2年間バンベルクで守備隊に勤務。その後ドイツが、敵国の数がますます増えたため、銃後の男子をますます深く把捉すべく、戦地勤務適当のレベルを下げざるをえなくなった結果、ドイツ軍がアラスで甚大な損失を被った後、ドゥゾルトも、戦地勤務適当とされた(彼は肉体的にはやや弱い男だった)。そして、ほとんど全滅した第8歩兵連隊の穴を埋めるべく、当面フランドル行きを命じられた。

ベルギーの都市ガンで連隊は完全に補充され、次いで6月に東部戦線のピンスク北方バラノヴィチに移された。そこでは、当時、ロシア革命のためほとんど完全な平穏が支配していた。同地で、この今や大半が兵役未経験の兵士によって構成された連隊は休養し、宿営生活になじんだ後、1917年8月、リガ地方のデュナ川西岸に移された。ここでは、強力なドイツ軍が、この川を越えての攻勢とリガの奪取に向けて結集していた。ドゥゾルトの連隊は、攻撃を開始する名誉を得、9月1日朝6時にデュナ川を越えた。部隊は一日中、ロシアの最強の抵抗砲火を浴びた。夜9時、敵の砲弾が彼をとらえた。彼は、多くの勇敢な英雄たちと共に、同地の小エーゲル川のほとりに急ぎ設置された英雄墓地に葬られた。

ヨーゼフ・ドゥゾルトは、かつては枝を広げていたドゥゾルト家[父親は仕立職親方]の最後の男で、エービングの若者の中では最良の、最も志操堅固で最も道徳的な若者だった。男らしい謙虚さ、強く際立った実行力、道徳的に非の打ち所がないこと、とりわけその信心深さが、彼を飾っていた。少年時代、彼は司祭職を志した。しかし、彼の熱い願いは、両親の抵抗で挫折した。結婚が遅かった両親には、彼のほか娘一人しかいなかった。そして彼をふさわしい跡継ぎと見ていた。この若者の信心深さは、教会の義務を良心的に果たすことだけでなく、特にたゆみない熱意をもって、祭式装飾一式、教会堂の飾り、また室内をきちんと整えることに配慮し、そのために多くの時間を割いたことに現れていた。その際、彼は早くに夫に先立たれた母親の最愛の息子で、彼女の生活を楽にしようと消耗するまで心配し、また、活発で熱情的な妹の最も忠実な兄であった。故郷を遠くはなれて勇敢な兵士として神のもとに赴いた息子・兄に対する二人の悲嘆は、心を打つものであった。戦死した英雄は、自らの死を予期し、攻撃戦の少し前、その最後の望みと決定を家へ書き送った。彼はとりわけ、自分と両親のための年忌のために献金するよう指定し

た。彼は、エービングの戦死者の中で、自らの魂の救済に配慮し、家族への関心を実証したただ一人の戦死者であった。平和のうちに休まれんことを！ 目からは遠く離れていても、彼は、エービングの村人の心の近くにあり続けるであろう。」(42ff.)

〈9月17日〉「今日は長い一日で、25時間ある。当局の指示で、朝3時にすべての時計を2時にもどさなければならなかった。〔来年〕4月15日には、前にもどした時間を再び標準の状態にもどすことになる。エービングの住民は、前にもどした時間に慣れ、それに従って生活した。石炭不足がこのずらしを当面必要としたのである。」(45)

〈9月18日〉1917年9月11日、第4予備歩兵連隊のG.D.〔名前は匿名化した〔以下、同じ〕〔1891-1917〕が、イーベルン付近の戦いで名譽の戦死を見出した。

「戦死者は、すばらしい、真摯な、朗らかな心の、宗教心のある、道徳面でも非の打ち所のない、分別もよくわきまえた若者であった。足のつま先から頭のとっぺんまで兵士で、1915年には、激しい榴弾の雨の中を、顔面右半分に榴弾の破片を受けながらも、負傷した僚友を仮包帯所まで担いでいった。その傷が完治するのは、数ヶ月かかった。

奇妙なことに、彼の母親はこの地域一帯で最悪の、最も怖れられた性悪女として通っていた。結婚4年という短期間の後、〔小ギュートラー〔零細農ないし小農〕の〕夫は耐え切れずに、ある晩出奔し行方知れずになった。戦死者の姉はエービングのバウアー、J.S.に嫁いだが、彼は、近衛歩兵連隊の兵士として、すでに1914年11月12日に戦死した。寡婦となった彼女は、間もなく義理の弟と性関係をもち、今、唯一の兄弟の死に際し妊娠中である。司祭は、戦士の寡婦として、恥を避けるため戦時結婚するよう勧めたが、彼女は結婚の締結によるその性関係の認可を拒んだ。」(45ff., 68f., 135f.)

〈9月26日(水)〉昨日朝8時半、戦死したヨーゼフ・ドゥゾルトの葬儀、今日、同時刻にG.D.の葬儀が執り行われた。葬儀用の柩は戦士を讃えるため花とろうそくで壮麗に飾られ、剣と兜、そして十字架にかけられた救い主の像がおかれた。司祭が追悼の言葉を述べ、列席者に感銘を与えずにはおかなかった。最後に、墓地に据えられた村の大砲が礼砲をとどろかせ、死者の遺族は、この地の習い通りに、大きな嘆きの叫びを上げた。他の多くの者もまた、かわいらしい二人の花嫁も含め、嘆き悲しんだ。(47f.)

〔第7次戦時公債応募のための宣伝〕〈10月3日(水)〉「すでに9月24日、〔シュタッフエルシュタイン郡の都市〕ゼスラハのディストリクト〔分郡〕視学官ドレッシュャーが、その郡の司祭や教員をラッテルスドルフの校舎に集めて、第7次戦時公債の活発な勧誘にかき立てた後、郡長ヘアピヒは、郡の聖職者・教員・市町村長を今日午前9時半、シュタッフエルシュタイン〔市〕のブリュッティング・ホールでの集会に招集した。被招集者は、それほど多くは出席しなかった。郡長氏が冷たい公式の、アルテンバンツ〔村〕の司祭エンドレス氏が熱烈で高度に愛国的な、そして〔フランシスコ会の〕十四聖人修道院のゲアルディアン氏がきわめて实际的でたくましい演説をし、参会者の公債勧誘意欲を活性化しようとした。エービングの司祭ヴェルフェルは、その後、勧誘が今回克服すべき諸困難に注意を促した。住民は人の気をなえさせる厭戦気分に関心、さらに、ここ数ヶ月来、ペストのように蔓延している拜金主義が、住民から偉大さ・完全さへの関心を奪い、カイザー・国王・祖国への愛を窒息させようとしており、それは、最も憂慮すべきことには、前線の兵士からの手紙でいっそう育まれている。居酒屋や鉄道車両、その他の出会いで、きわめて恐るべき話が聞かれる。「我々がドイツであれ、イギリス、ロシア、フランスになるのであれば、それは同じことで、「お偉方」は、友好国でも敵国でも、互いに一致しており、庶民(der kleine Mann)は、いつも苦勞しなければならぬ。1,800万の俸給を得るカイザー、700万の国王を、我々は必要とするのか。100万の俸給の大統領が、フランスやアメリカを見れば分かるように、事をより悪くは運ばないというのに。戦時公債に1ペニヒでも応募する者は、打ち殺すべきだ。応募した戦時公債は、お偉方にだけ快適な、無意味な人殺しの戦争を、長引かせるだけなのだから」と。こうした話は、蚊のようにぶんぶん音を立てて飛び回っている。そして特にどぎつく辛辣にふるまっているのは、女性たちである。彼女たちは、もとより、戦争のために、戦前大事な習慣となっていた多くを無しで済まざるを得ないのである。

10月2日、ヒンデンブルクの70歳の誕生日は、エービングでは、手足のある者はみな、好天のもと、

農村司祭の第一次世界大戦「年代記」(1917~18年)

ジャガイモの収穫に忙しかったこともあり、跡形もなく過ぎた。というのは、彼もまた、「カイザーの協力者」である「お偉方」の一人だからである。公債の完全な成功の見込みは、さしあたり悪い。

食料品の凶々しい暴利でしばしば多大なかねを手にした人々は、もはやほとんど、自分のかねを村の信用組合に預ける勇気をもっていない。彼らは、民衆が調達するものはみな「無い」ものになってしまうと怖れている。「お偉方や詐欺師、納入業者や工業家、株主は国家から何百万というかねを懐に入れるが、戦時公債に応募するのは控えている」、というのである。この批判の最初の部分は、民衆の言うことが当たっている。というのは、国家はかねを納入業者に最も恥知らずなやり方で浪費し、そして将校たちは、可能なところではどこでも、豪華な生活を送る一方、兵士はしばしば不十分な食事しか与えられないからである。しかし、納入業者や株主も、たっぷり戦時公債に応募している。」(48ff.)

〈10月7日(日)ないし10月8日(月)〉〔本文には〈11月7日(月)〉とあり、11月は10月の誤りと編者の注記がある。ただし、7日は日曜であり、8日(月)の可能性もある〕「昨夜、司祭〔ヴェルフェル〕は、グローの居酒屋で、第7次戦時公債推薦の集会を開いた。15名しか現れず、女性や若者は来なかった。女性はきわめて友好的に招待されたのだが。弁士は、出席者の顔に公債に敵対的な空気を読み取ったので、無駄な鉄砲を撃たないよう、ごく短く済ませた。居合わせた村長シュナイダーバンガーは、村の軽率で気のよい女性たちにきわめて厳しい言葉を発した。というのは、女性たちが、夫が戦場で非常な労苦や欠乏に耐え、ドイツ人捕虜がフランスでフランス人女性にとてもひどい扱いを受けている時に、フランス人捕虜とあまりによく付き合い、写真を撮らせたり、十四聖人修道院に彼らと巡礼に出かけたり、バンベルクまで遠足したり、とてもおいしい料理をつくったりしているからである。

彼は、また、農民たちに、彼らがすべての法に反して、すなわち「闇」で豚をほふるのなら、悪事が露見すれば厳罰に処せられるので、それほどあからさまにではなく、ひそかにするよう請うた。居合わせた農民たちで、闇屠殺の犯罪の責を感じている者は、この親身の警告を反論することなく受け止めた。

昨日は、乳児福祉のための各戸募金も行われた。募金者を断る者もかなりいたが、若干出す者もあり、合わせて40マルクになった。教養と財産のある高貴な人々は、ドイツでは子供を2~3名以上つくらぬよう気をつけている。彼らは、それだけいっそう熱心に、国民の増加に配慮するよう庶民に訴え、妊婦を支援し、他人の乳児に母乳を与えるよう心を配り、子供の正しい扱いにも配慮する。偽善者たちは、自分の妻の膨れる胸が、神がこの乳桶を作らせた給うた目的により多く、よりしばしば仕えるように、もっと注意を払うべきである。」(50f.)

〈10月20日〉「新聞は、第7次戦時公債が125億マルクの成果を得たと報じている。これは、一方では、ドイツの破壊し得ない豊かさの、他方では、なお存在している広汎な層の愛国心の、すばらしい証であり、その中にはすでにいっそうの戦時税への恐れからしてエービングの農民は入っていないが、他方、エービングの信用組合も730マルク、私人はひそかに少なくとも1万2,000マルク応募した。」(51)

〈10月21日〉「先週には、数名の子供の父親で、休暇ですでにかなり長く故郷に滞在し、〔出征〕家族手当を受けている後備兵〔ハインリヒ・〕ハーゲル〔-1925(享年48歳)〕が、電報で呼び戻された。「この売女戦争・いんちき戦争め」とあからさまに罵倒しながら、彼は停留場で、彼を故郷から連れ去る列車に乗り込んだ。

その代わりに、後備兵フィリップ・メルツバハー〔1874-1947〕が休暇で帰郷した。彼は、実直なパウアーであり、村一番の美女で最も豊満な女性を妻にもつという幸せ者である。彼の奥方は、その潜在をできるだけ快適なものにすべく、かぐわしい鯉を〔オープンで〕焼き、ガチョウ・アヒル・鶏を焼き、太った豚はすでに事前に闇でほふってあった。こうして、彼女は、戦争英雄が戦場で耐え抜いてきた苦難の償いを、自分も満足するやり方でつけたのである。ドイツの女性・奥方にふさわしい者に誉れあれ。」(51f.)

〔女学校への泥棒の侵入〕〈10月23日(火)〉「〔…〕〔闇取引〕不誠実と粗野とが、総じてこの戦争で憂慮すべき隆盛を遂げている。うそは、もはや罪とは見なされず、暴利やあらゆる種類の法律違反も同様である。政府が農産物の収穫量を確認させると、農民たちは馬鹿ですら笑わずにはいられない申告をする。乳牛は供出すべき乳を出さない、と。それなのに、密輸はきわめて繁茂している。穀物やジャガイモは、最高価格をはるかに越えて私人に大量に売られ、豚はひそかにほふられ、肉は途方もない価格で売却

されている。ベーコンが1ポンド10マルク。乳牛は乳が出ないというのに、買出し人のためのバターは大量にある。1ポンド3~4マルク。バターを地方警察や都市警察の厳しい取締りをくぐってパンベルクに闇で持ち込む、かなりの数の農婦たちの機転のよさには驚かざるを得ない。〔…〕

〔ウンターフランケン県エーベルン郡の市場町〕 ミュルスバハの製粉所で小麦40袋が地方警察により押収されたということが分かった時、一連の家族は大きな恐怖に襲われた。袋の大半は、「収穫の失敗によって小麦を作付けしなかった」というエービングの家族からのものだったからである。〔…〕

戦時における広汎な層の農民層に対する嫌悪感は、「自家消費者」たる農民たちが、抜群によい、白くてとてもおいしいパンを食べているのに、他のいわゆる被供給資格者たるドイツ人——それは人口の少なくとも7割に当る——が、製粉94%の全く黒い、粗くてまずいパンを食べざるを得ない、そして1日220~280グラム手に入れられさえすればうれしいという注目すべき事実によって容易に説明されうる。〔…〕もうけ欲、同胞への容赦なさ、そしてうそ偽りが、まさに戦争が長く続いていることによって、都市で、おそらく農村でよりも多く、あらゆるおぞましい花を咲かせているのである。」(51f.)

〈10月28日〉「帝国宰相ミヒャエーリスの辞職は、エービングの人々をもほとんど興奮させたが、確実となった。多くの人々が、素朴な農村住民の間でも、全政治情勢を見通して、こう言っている。ユダヤ人の金持ちが玉座にのぼり世界の支配者としてふるまうか、社会民主党が国家という船の舵を握るかするまでは、国内平和は到来しないだろう。後者は前者とそれ程違わない。というのは、金持ちの袋と乞食の袋とは、いつも兄弟姉妹か同盟者だからである。ユダヤ人は、前者を所持し、その傍ら、乞食袋の大衆を導き指導するのである。」(54)

「多くの人々」がどれだけいるかは別として、ヴェルフェル自身がこうしたユダヤ人と社会民主党とを結びつける見方の持ち主であったことは明らかであろう。そして、こうした見方がすでにこの段階で出されていることは、後の「七首伝説」の前史として注目される⁽¹²⁾。

〈11月2日〉「昨日〔万聖節〕午後と今日〔万霊節〕午前、墓地は祭りの場の光景を呈した。死者の墓は、愛、感謝、信心深さにより、白・赤の紙のバラのすばらしい飾りで飾られ、それに無数のすばらしい菊の生花や墓灯が加わった。聖堂区民は全員、昨日午後と今日午前、喪服に身を包み、こう歌いながら静々と墓地へと向かった。「我らが愛する人々は、安らぎのうちに、死によって我らに別れを告げた。そして彼らは、いのちなく墓穴の中に深くはいつていった。しかし、彼らの霊は、とわに生き続ける」と。計り知れないほど多くの涙が、特に遠く敵地で復活の日を待ちながら眠っている英雄たちのために流された。彼らの墓には、いかなる愛の印も、花も、花輪も手向けることができず、聖水の滴を振り掛けることもできなかったのである。それだけ熱心に、これら戦争の犠牲者——エービングでは14名——のために祈りが捧げられた。」(54)

〔戦時説教と勝利の鐘〕 〈11月4日(日)〉「今日午前、^{クリクスブレーディクト}ニュールンベルクのフランシスコ派神父で従軍司祭のP.レオポルト・ハフナーが1時間にわたって戦時説教をし、前線での宗教的・道徳的生活について光に充ちた啓蒙を提供した。司祭は、3年もの間、フランス・ロシア・ルーマニアで従軍していた。彼の話は、真のカトリック・キリスト教の精神に貫かれ、経験の強固な壁に基づいており、深い印象を与え、多くの偏見や謬見を追い払った。

これに続き、午後1時、上イタリア東部のフリウリにおける同盟側の輝かしい突破による勝利のために、勝利の鐘が長い4ヶ月の間隔をおいて鳴り響いた。」(55)

〈11月6日(火)〉「付け加えて書いておくと、従軍司祭レオポルト氏は、前線から銃後に1~2ヶ月間休暇を得て、都市や市場町、聖堂区村を旅し、講演によって人々の深く消沈した愛国的空気を再び高揚させる多くの従軍司祭の一人である。逆に、銃後から、一連の祖国のことを真剣に憂慮した人々が前線に急ぎ赴き、戦士に対する講演によって、彼らを銃後の空気や出来事について安心させている。

こうした相互の影響は、よい結果をもともなっている。しかし、黄金の子牛の祖国なき崇拜者は、国民の空気のことなど少しも気にかけない。彼らは、ますます厚かましく国民と帝国を搾取し、恥知らずにも私腹を肥やしなが、彼ら正真正銘の木食い虫は、ドイツの榊の幹の下方、国民を、自らの悪しき拜金主義的模範によって腐食させ、上方、梢では、バイエルン邦議会やドイツ帝国議会のそのお雇い弟子によって仕込まれた政治的策動によって腐食させる。馬鹿なドイツのミーヒェル〔典型的なドイツ人〕は、それを甘受し、モーセとレビの息子たちの先例に倣って黄金の子牛を打ち壊し、その周りで踊る人々にリンチを加えることがない。

〔エービングにおける捕虜〕 3日前、第2予備歩兵連隊の兵士、パウアーのロレンツ・キュンメルマン [1880-1925] がロートリンゲンのバン＝ド＝サット (スモーヌ) 付近の戦場から16日間の休暇で帰郷し、妻と6名の子供たちはとても喜んだ。キュンメルマンは、エービングの副村長で、世界大戦に当初から加わっていた。彼は、事態の深刻さをよく把握し、何のために彼とその家族がかくも手痛い犠牲を払っているのかをわきまえている数少ない一人である。彼は、すばらしい財産を所持しており、それを戦時中、妻——ちなみに彼女にはまだ育ち上がっていない6名の子供の世話がのしかかっているのだが(長男[ルートヴィヒ(1905-1988)]は11歳)——が、片手だけの75歳の従兄と経営している。その際、彼女は、いつも朗らかで、静かで、親切であり、ついでに、穀物の闇製粉や豚の闇屠殺で家族の食卓を豊かにととのえている。当局との交渉では、かなりの勇猛果敢さ、大胆さを発揮し、こうしてつねにうまく切り抜けることをわきまえている。帰郷した夫は司祭に、経営がほっとかれ、大きな損害を受けたと嘆いた。

彼がほめたたえたのはフランス人捕虜で、彼は週3日仕事しに送られてくる。プルトーニュ出身の農家の息子で、勤勉、控え目、器用、子供好きで、ようやく21歳である。

こうした戦争捕虜は、エービングには13名いる。彼らは出征兵士の家族に配分され、そこで食事も出される。夜は、よく閉ざされた、窓に鉄格子がはめられている家に泊まる。大半は、若い、清潔な男たちで、清潔さ、よい食事、まともな扱いに重きをおいている。日曜には、感じのよいフランスの軍服を着て村を練り歩き、村の美女たちの好意を少なからずかき立てている。宗教については、二人を除き関わりあおうとはしない。信心深い二人のうち一人は、あらゆるミサに模範的な敬虔さと謙虚さで参加している。

1916年から1917年秋まで、彼らはフランスの故郷からぜいたくなほど沢山のすばらしい食料品、チョコレート、ラスク、砂糖、コーヒー豆、缶詰、米、茶その他を受け取っていた。それで彼らは、しばしばドイツの食事を断り、日曜には自分で料理をする。その際彼らは、特に太った猫に執心する。よい食事を与えられている猫には、高く払い、おいしい焼き肉にする。しかし、1917年秋、潜水艦作戦とフランスでの不作のため、ろくなものも食べていないように見える。つまるところ、食料品の発送はまれになり、食事にやかましい連中が、ドイツの黒パンやジャガイモの団子にかぶりついているのである。

この夏、こうした捕虜2名が逃亡したが、ハルシュタット村までしか行けなかった。エービングに戻った彼らは、その後は、自らの運命に従うことになった。それが、心への影響という点では、前線の幸せな仲間より悲しいものであることは、エービングの人々にも分かった。(55ff.)

フランス人捕虜に関する記述は、シュティーゲレによるジルハイム村のセルビア人捕虜の記述とも重なり合うものとして興味深い。セルビア人の働きが村人の賞賛を博したことが指摘されるとともに(1916年10月18日の日記)、厳しい労働に対するセルビア人の労働拒否事件にも言及されている(1917年3月10日の日記)。エービングの「逃亡」事件は、これに照応するものであろうか。戦時の農村での捕虜の問題としては、村の女性との男女関係の問題があった。この点は、シュティーゲレの日記では判然としないが、この年代記には上記のようにくりかえし出てくるところであり、また、ツィーマンによる第一次世界大戦下バイエルンの農村研究にも指摘がある⁽¹³⁾。

〔暴利価格と買出し人〕〈11月22日〉「秋は、穏やかな最高の日和をもたらした。畑は、最良の乳牛の餌、とりわけカラシナと大量にできたいわゆる白カブを農婦に提供し、彼女たちを喜ばせた。ただキャベツだけは全く不作で、農村民の好物であるザウアークラウトをつくることは断念せざるを得なかった。かなりの者は、それをカブの葉で代用している。

国家ないし帝国食糧庁の誤った食糧政策で、牛乳、バター、そして主として豚の、じっさい低過ぎる最高価格によって、農民層に大きな不満が持ち込まれ、農民は全く、不誠実、現行規定の回避に導かれている。

農村民の靴、衣類、家財、機械、ロープ類、鉄への需要の価格は、平時価格の4倍から6倍にのぼっている。農民は、しかし、その生産物を平時価格からとてもそれほど高くはない価格で提供すべきだといのである。商業や工業には、大半の商品についてそもそも最高価格を定めていず、資本家層によってまさに恥知らずな価格が要求されている。

窮乏化しないように、そして、教養と文化の独占者に遅れていると思われないうために、農民は、自分の方でも、食糧の最高価格を尊重せず、その生産物にできるだけ高く払わせることを余儀なくされている。それでも、巨大な戦争利潤を懐に収めている民衆搾取者、戦争納入業者に後れをとらざるをえないのである。〔この後、プロテスタントのチューリンゲン地方からフランケンのこのカトリック地域への買出しの群についての叙述に続いて〕これらのチューリンゲン人はじっさいまたしっかり支払える。というのは、彼らは、故郷で軍需品のために働き、かねにまみれているからである。彼らは一人残らずプロテスタントであり、マイン渓谷の者はカトリックであるにもかかわらず、彼らの間では意思の疎通があり、ルターの400年記念祭の1917年10月31日も、何の不協和音も生み出さなかった。〔…〕それに、戦時はこうした記念祭を祝うのにふさわしくはない。〕(57f.)

この頃には、統制経済に対する農民の「不誠実、現行規定の回避」に一定の理解が示され、「商業や工業」、とりわけ「巨大な戦争利潤を懐に収めている民衆搾取者、戦争納入業者」、また、「国家ないし帝国食糧庁の誤った食糧政策」に批判が向けられるようになっていることが注目される。

〔休暇の前線兵士〕〈11月25日〉「実に多くの若い、また年輩の戦士が、しかし圧倒的に若い方の前線兵士が、西部から休暇で帰郷していたが、昨日、電信で休暇が10日間、12月13日まで延長されたことを知らされた。

大喜び！ ただそこには、何かよくないことがあるという感じ、またこの寛大な休暇の延長は西部での部隊の大移動を推測させるというドイツ的予感も、混じていた。事情通を任じている男たちは、多くの師団が北イタリア戦線から、またそれ以上の数がロシア戦線から西部へ、フランス戦線の連合国軍に主要な打撃を与え、戦争を決するパリないしカレーへの突破を実施すべく、集結されるという旨を秘密めかして示唆した。再び、長いこと見られなかった戦闘的な熱狂が国民の中へと到来した。恐るべき、ますます耐えがなくなってくる戦争の苦痛に正当にも責任あるとされたフランス、なかんずくイギリスに対する憤激は、徐々に普通の人々の間でも憎しみにまで高まり、それは、カンブレー、イーペルン、シャンパーニュでの流血の戦いの報道が毎日届くとともに、いっそう高まった。敵が勝利しなくとも、ドイツもまた勝利することはない。しかし、多くの死の犠牲を戦闘は求めるのである。〕(59)

〔Ⅱ〕 ロシアとの講和と「帝国薄口ビール」

〈11月30日〉「昨日夕方、労働者がバンベルクから、ロシア、すなわち、同国の外務人民委員トロツ

キー氏と人民委員評議会議長レーニン氏が、交戦諸国の人民と政府に、休戦と全面講和について交渉に入るとの提案を行ったという知らせをもたらした。帝国宰相ヘルトリングは、そのような交渉の用意ありと表明した。この知らせは、その夜のうちに野火のように村を駆けめぐった。人々は、これが平和の曙光の最初のきらめきを意味すると感じ、喜ばしい希望が、締め付けられた胸をふくらませた。彼らは、真の平和の太陽が昇るまでには、なお多くの血が流されるだろう、多くの若い盛りの命がなおつもとられるだろうと怖れてもいるが。というのは、イギリス人の手ごわく血の濃い性格からして、彼らがドイツを世界経済と世界諸国民の協調から閉め出そうとするその計画をそんなに速やかに葬り去ることはないだろうと、人々が推測するのも根拠のないことではなかったからである。とはいえ、鉄のごとき必然性とドイツの剣の前に結局はイギリスも屈すると期待している。」(59f.)

〔12月1日〕「保線区長の寡婦 [エリーザベト・] シュミットは [夫ヨーハンは、1913年に49歳で死去]、息子7名の母で、その内3名が戦場にいる。彼女は、フランドルの息子ハンス [1893年生れ] から、彼女の20歳の息子で、第5歩兵連隊の上級兵アンドレアスが、9月27日午後イーベルン付近で毒ガスにやられ、野戦病院で手当を受けるべく、イギリス軍にガス弾を浴びせられた最前線の塹壕を去ったという知らせを受けた。その時以来、彼の消息は消えてしまった。イギリス軍により捕虜となったということは、考えがたい。彼の死は、イギリスの榴弾によるもので、それがいずれにせよ彼を粉々にし、ないしは生き埋めにしたというのが、とてもありそうなことなのである。」(60)

〔侵入した泥棒、捉えられる〕〈12月4日〉 日曜日、12月2日、冬が大雪、そしてさらにすごい寒気とともに始まった。12月3日、居酒屋・パウアーの寡婦クララ・ベヒマン [1876-1931] の家の2階に夜、よその女性が盗みに入り、大勢に追われてつかまった。リュックサックには、かなりの下着類と大きなパン2個がはいていた。ラッテルスドルフの地方警察の巡査が電話で呼ばれ、その夜のうちに、同地に連行され、その居酒屋の一室に閉じ込められたが、再び小さな粉袋を盗んだところを店の息子に見つかり、散々殴られた上で追い出され、姿を消してしまった。(61)

〔12月7日〕「寒さは今日午後まで続いたが、ようやくやわらぎ、燃料を十分に備えていない多くの人々を喜ばせた。

今朝、3名のフランス人捕虜が村を去った。その中には、捕虜の中で一番信心深かったキリスト者も含まれていた。戦士の妻であるその女主人は、彼のことをとても好きになり、二度彼と一緒に十四聖人修道院まで巡礼に出かけたことから、[ウンターフランケン県ハンメルブルク郡の都市]ハンメルブルクの収容所司令官に密告された。その結果、この、乙女たちからも好意を寄せられた模範的なフランス人は、彼および彼女たちの悲しんだことに、さらに二人の仲間とともに、村を去って、ハンメルブルクの収容所で治療を受けることとなった。巡査に付き添われた3名の捕虜は、正装に身を包み、その清潔さでもう一度エービングの人々の賛嘆の的となった。

〔休戦交渉〕 12月7日から17日まで10日間の戦闘停止が、ロシア、ルーマニアと正規の休戦に関する交渉のために協定されたという、新聞がもたらした報道は、大きな喜びをまきおこした。一般に、東部戦線での戦闘停止はすでに総じて間もない全般的講和の先駆けと見られている。戦闘停止を特に歓迎したのは、多くの試練にさらされ、あまりにも心配を負わされた女性たち、夫なしでかくも長く済まされなければならない妻たちや、許婚を待つ乙女たちであった。毎週金曜日の夕方4時半に行われる戦時の祈りは、それゆえ、今日はふだんよりはるかに多くの参加者があった。」(61f.)

盗みに入った女性を初め、この日記には、シュティーゲレの日記とは異なり、実に多彩な女性たちが、男女関係を含め登場することが注目されよう。ヴェルフェルの情報源も、その多くを女性たちに負っていたのではなかろうか。

〔12月17日〕「東部戦線での戦闘停止は、講和交渉の開始をともなう確固とした休戦となった。この

幸せと喜びを約束する事実は、しかし、戦争に何らかに参加していない17歳から60歳までのドイツ男子全員の申告義務——彼らを必要に応じて国の内外で何らかの愛国的目的に使用するため——によって非常にくもらされた。同時に、兵役を終えた45歳以上の兵士で、子供が多い父親としてさしあたり除隊となった者が、再びクリスマスに守備隊へと召集された。これらの散々苦勞した男たちの体にひどい恐怖が走ったことは、当然悪くとするわけにはいかない。この頃、若い方の兵士も、長い前線勤務の後、前線から休暇を得て帰って来た。彼らは、帰郷するや否や電信で再び呼び戻された。しかし、彼らはそれに従わず、休暇の期限が過ぎるまで、勝手に家に留まった。彼らが怒って言うには、「後にしてきたばかりの前線の地獄にすぐさま戻るよりは、2〜3ヶ月監獄に入れられたほうがましだ。前線では、恐ろしい殺人戦争の全恐怖がもっとひどい形で自分たちを待っていることは確実なのだ」と。西部戦線では戦争に決着をつける殺人的な戦闘になる、ドイツ軍はそこで猛烈な勢いで、犠牲を顧みることなしに、できる限り速やかに突破するであろう、ということは誰もが確実に知っており、ドイツ全国でそれが強力に求められてもいるのだから。手ごわい敵の料簡をたたきなおし、彼らがいつもわが方の申し出を嘲笑的に拒否した平和を彼らに強制するには、それ以外に手段はないのである。

銃後では、欠乏はますます身にこたえるものとなってきている。すべてが、石炭、薪、衣服、下着、靴が不足している。縫い糸はもうほとんど入手できず、それでもなお、何とか文明人として人前に出るには、ありとあらゆるものをつくらなければならない。必要不可欠な生活必需品の価格は、日々上がっているのに、政府は、金銭欲にかられ国民を搾取る商売の触手を抑えることを思いつかない。ただ農民だけに、最高価格、つまり、牛乳、バター、家畜、穀物などなどのあまりに低過ぎる価格が存続している。農民は、この戦争で貧窮化し始めている。無数の人々が豊かになっているのに。これは、政治的に見て珍妙なことであるが、政府の側の許されざる愚行である。というのは、農民層は、古来、国民の礎、その若返りの泉、その背骨をなしてきたし、今もなしている。それは、国家を支え、それを最もよく担う部分である。そしてこの農民層が、戦争によって、財政的、宗教的、道徳的な点で、全く強く傷つけられたのである。それが他のいかなる階層よりも、はるかに多くの死と血の犠牲をも払ったことは度外視しても。

そして、聖職者には、農民にその生産物を全く不十分な価格で残らず供出するよう鞭打つことが求められている。全く悦ばしいことに、農民の司祭の大半は、父祖の宗教をほとんど唯一堅持している農民層を、こうして徐々に屠殺するのに一役買うことを拒んでいる。彼らは、農民たちがその生産物をできるだけ高く闇取引で売却しても、心が乱されることのないようにしている。結局のところ、農民民にとっては、単なる経済的自己防衛なのだから。そして、聖職者が戦後、特に戦勝後、上と下から足蹴にされることは、全く明らかなのである。」(62f.)

[1917年のクリスマス] <[1918年] 1月5日> 「ひどい寒さと深い雪の中で、クリスマスが祝われた。できさえする者はみな、ミサに参列した。「地ニハ平和ヲ」は、今回はついに、ロシアの平和意欲と東部戦線での休戦のゆえに、真の天の知らせとみなされた。[...] 平和な気分をいささか弱めるものとなったのは、イギリス、アメリカ、フランスに講和交渉に参加することを決断させるため、1917年12月25日から1918年1月4日までプレスト=リトフスクの講和交渉が中断されたことだった。人々は、彼らがその戦争意欲から離れることなく、逆に、ロシアを扇動して、平和への傾斜から引き離そうとすると予感しているのである。人々は、ロシアをもはや信用せず、「無償金・無併合!」という講和交渉の根本条件にも本当に同意しているわけでもない。ドイツ陸軍の絶えざる勝利の報道によってドイツ軍の勝利を確信し、帝国の将来、また帝国の窮境についても、広い視野が欠けている農民民には、かかる基礎の上での平和は、人々がなした巨大な犠牲からすれば一つの不正であり、外交官の弱さだと思われるのである。

クリスマス祝日の二日目、グローの居酒屋で、人がよく集まった農民集會が開かれ、エービングの司祭ヴェルフェルが開會し、政治・経済問題によく通じた——こうした問題を楽々と解決するが、必ずしも賛同を呼ぶわけではない——メードリッツ村の助任司祭プフェッファー〔前出〕が主演説を行った。彼はきわめて落ち着いて冷静に話し、農民を将来への信頼で満たそうとした。というのは、ドイツの農民層が戦後、戦争がいかなる結末を見ようとも、きわめて厳しい時代を迎えること、彼らがその生存のために戦わなければならないことは、最も無邪気な者でも予感しているからである。主人のグローは、この真剣な集

農村司祭の第一次世界大戦「年代記」(1917~18年)

会の間、うす汚い水——ビールという言葉はこの飲み物には上等すぎる——を供したが、あまりに薄く、気が抜けていて、空疎だったので、暗い気分を引き立てることはできなかった。

日曜日、12月30日、ライプアイゼン信用組合が、32名出席した総会——簿上では組合員は76名——を開いた。会計シュナイダーバンガーの年次報告からは、1916年に債務者がよく返済したことが浮かび上がった。

大晦日の夜は、ひどい寒さで、一般にとっても静かに過ぎた。大人に近い若者、娘、また少年や帰休兵たちは、この夜やその他の夜を、月もようやく真夜中過ぎに出たので、勇敢に櫓に乗ること、現代風に言えば、櫓すべりをすることに利用した。そこでは、よい評判をリスクにさらすことなく、いっそう親密になることができた。

1917年は、エービングでは、子供が、一人だけだったが、幸運にも男の子が生まれ、洗礼を受けた[フィリップ・メルツバハーが1917年2月6日に出生]。死んだのは10名、男性1名、女性10名だった[?]。戦死者は2名、ドッゾルトとドクターヴァイヒである。結婚したのは、誰もいなかった。教養ある愛国的な人士は、このところ、乳児福祉のために力を尽くし、その目的のために多大な募金をしている。しかし、不思議なことに、自分では乳児を全然もっていないか、わずかしかない。これらヒーローたちは、子育ての仕事は、つましく愚かな者共に任せ、自分自身は自らの財産の増大にかまけているのである。ドイツ国民に奇妙な変化が起こっている。都市と農村は、物価騰貴や収入が少なすぎることに苦情を言っている。それなのに、人々は貯蓄金庫や銀行の入り口に群がって、預金しようとしている。かねの悪魔が人々をとらえ、彼らをますます堅くつかんで離さない。将来にとっては、この獲得欲は、何もよい予感がしない。それが、なぜ「子供の世紀」(エキセントリックな学校の先生は20世紀のことをそう呼んでいる)に子供がかくも減っているかの理由でもある。人々には、死んだかねの方が、生ける子供よりもよいのである。

[1918年]

[君主制の終焉]

ドイツ国民は、信頼感をもって将来に眼を向けることができる。過ぎ去った1年は、全戦線で勝利を誇ったか、ともかくも不敗だった。ロシアは、ほとんど戦闘能力がなく、ルーマニアも同様である。イギリスが1917年12月にエルサレムを我々の同盟国トルコから奪ったことは、ドイツ人としては濡れた目で、しかしキリスト教徒としては乾いた目で、受け止めた。西部戦線の前後では、わが部隊が無数の大群になり——246ヶ師団、つまり5~600万の戦う能力ある男たちという——強大な黒雲のようにかたまっており、敵の不運を予測させている。人々は、一般に、攻勢の開始、フランス・イギリス戦線の突破、多大な捕虜数、大砲の巨大な鹵獲、パリ奪取、次いで平和を期待している。」(64ff.)

<1月18日>「フランスでの期待された突破の代わりに、1月前半は、ひどい寒さ、深い雪、そして、10日間の中断の後に再開された、ブレスト=リトフスクでの講和交渉の経過に関する悪い知らせをもたらした。3年半にわたって超人的な犠牲を払ったドイツ国民は、窮境によって一連の厚かましいユダヤ人と交渉することを——というのは、ロシア政府と講和交渉の当事者たる、レーニン、トロツキー、ヤッフェは、ユダヤ人なのである——余儀なくされていることを、ひそかに恥ずかしく思っていた。正真正銘のユダヤの厚かましさを、自らの超人性をあまりにも確信しているこれらのユダヤ人は、ロシアの新聞でドイツに殴りかかり、あらゆる国々の国際的社会民主主義と活発に接触をもち、誠実なドイツの平和の人キュールマン次官〔外相〕、ホフマン將軍の背後で扇動し、あおり立て、あたかも勝者かのごとく条件や要求を出し、そこでドイツ国民全体が、エービングの人々を含めて、青筋を立てて怒り、消えた戦争熱の炎が再び迅速に燃え上がった。これは、銃後のドイツ人の心の奥底に、いかに悪が優勢になったかに見えたにせよ、やはり祖国への忠誠と結びついた真にドイツ的な本質、ドイツの男の誇りと名譽心が、根絶しがたく深く根を下ろしていることの証左なのである。平和のことなどは、かなりの人々がもはや知ろうともしなかった。勝利に充ちた剣こそが、我々ドイツ人にとって最良の仲裁人なのだと、人々は感じたのである。

最近、エービングで最も背が高く最もやせている男、45歳のパウアー〔ゲオルク・〕メルクライン[1872-1942]が召集された。彼は7名の子宝に恵まれている。60歳までの全男子が村長に占領地域か銃

後でのあらゆる種類の補助勤務を申し出なければならなかった。

1月8日、なお朝まだきに、エービング住民の女性たちの間ではある種の興奮が支配していた。ここは4年の間もはやなかったこと、つまり結婚がまたあったのである。歩兵グレゴア・シュミット [1888-1964] は、ついに、多くの障害と抵抗を克服して、その義姉、戦士 [ヨーハン・シュミット (1886-1914)] の寡婦ロジーネ・シュミット (旧姓ドッターヴァイヒ) [1889-1960] と結婚した。花嫁のとて祝福された状態 [大きいおなか] のため、身分登録所 [出生・結婚・死亡などを届け出る一種の戸籍役場] での結婚は1月7日に村長のところで、教会での結婚は、まだ夜のあけやらぬ朝7時に執り行わなければならなかった。そこで、好奇心満々の連中は、どんなに、どんよりとした目で、首をかがめ、背伸びをしても、あまり見ることができなかった。

婿は、教会での、彼の将来の人生を決定する行為の後、自宅で木を割り始め、こうして、自分が、新妻の夫として、また間もなく生れる子供の父親としての責任を自覚していることを示した。それだけいっそう、彼には昼の婚礼の料理がおいしかった。

【エービングに冬の嵐】 火曜、雪解け模様の天気になり、雨が降り始めた。水曜午後4時、この地を激しい嵐が大雨をともなって吹き荒れた。水曜、1月16日、マイン川が突如、岸を越えて、村の下方部を水浸しにし始めた。夜には強く凍ったけれども。午後には、天は、20センチの深さのどさ雪を降らせた。木曜夜は雨がかなり降り、雪は金曜の朝には消えた。嵐が強電線をひきちぎったので、エービングは2日間電気なしだった。石油がなく、わずかなろうそくしかなかった。闇が夜の村をおおい、マイン溪谷をとうとうと流れる水がぞっとするような歌を歌った。多くの者は、その時、ひどくなった天気のあるゆるつらさにさらされながら、無限の苦痛にもかかわらず、雄々しく自らの義務を果たしている前線の忠実な兵士を思った。」(67ff.)

レーニンがユダヤ系ではないが、いずれにせよここには、著者の強烈な反ユダヤ主義があらわに示されており、以下でも明らかなように、彼のロシア革命観を大きく規定するものとなっている。

〈1月30日〉「時代は、ますますひどくなる。人々を興奮させるに足る出来事が、文字通り次々に起こる。講和交渉が行われているブレスト＝リトフスクについての報道は、ますます絶望的になっている。人々は、ロシアの厚かましいユダヤ人交渉者が、ヨーロッパ諸国民に、反乱、転覆、皇帝殺し、私有財産の廃止や、その他の民主主義の贈り物のための時間を生み出すために、四国同盟側の代表を愚弄していると感じている。偶像マンモン [富] は、ただひとりの陛下だと感じており、荒れ狂っている。しかし、イギリスやフランスの民衆ないし賤民は、平静にしており、ロシア人が自分の国をカオスに化すままにさせている。ドイツでのみ、光と啓蒙の中心ベルリンと、近代的教養が2～3,000名の学校教師によって「ニュールンベルクのじょうご」[速修法] で量り売りされているニュールンベルクとでのみ、祖国の裏切り者が、ウィーンの労働者が飢えにかられて悪い手本で先行した後、自らの祖国の最も重大な時期に罷業をし、街頭デモで平和を騒然と要求した。しかし、労働者層の中核は、馬鹿踊りを共にしなかった。とりわけ、アメリカのかねがこの祖国への裏切りの背後に深くひそんでいることを、ほとんどどの子供でも知っていたから。

【学校勤務の教会下級勤務からの分離】 ところで、バイエルンの学校教員は、実のところ、労働者より少しもよくはない。彼らは、祖国が窮地に陥っているのを利用して、彼らに全く法外な高給をもらすべき新教員法を非常に激しく要求した。駆り立てられたミュンヘンの文部省は、提案を嫌い、議員たちが法案の提出を拒否すると期待した。しかし、議員たちは、次の選挙で教員におさらばされるのを恐れ、可能であるのなら法案は審議されるべきであると決議した。諸当局も、国民と同様、教員を怖れているのである。

バイエルン教員の親玉、アウクスブルクの上級教員シューベルト⁽¹⁴⁾は、法案の必要性をこう基礎づけた。「法律はなお戦争中に定められなければならない。というのは、戦後にはそのかねがないであろうから」と。これはひどい言い草であり、ゆすりのにおいがする。しかし、偉大なる瞬間は、小さな輩を見出すのである。

この、民衆教育者によって演じられた見世物、その存続と未来が問われているドイツのおそるべき状態を顧みずにひけらかされた財布の心配は、エゴイズムとマンモンへの隷属が徐々に文化と教養の核へとみ出して行き、あらゆる羞恥心、あらゆる名誉心をも絶滅させたことの偽善的な徴候である。無数の集会で、教員は、彼らの階層に泥を塗る教会雇人業務を学校業務から分離することを要求した。今、まさにこの分離が現実になろうとし、それとともに、それと結びついた多くの場合かなりの額の収入の喪失が迫った時、少なからずの者が教会雇人業務を協定によって保持しようとした。すなわち、彼らは、仕事をするこなしに、収入を懐に入れ続けようとしたのである。司祭はエービングの教師に、教員法が通った場合、教会雇人の業務とその収入を断念させ、オルガン奏者の業務に限定するようにさせた。

【あらゆる豚の屠殺】 2月1日までにすべての豚を殺すよう当局から命じられた時、エービングの人々の体に激しい驚愕が走った。この血の滴る措置は、豚の食べるジャガイモ、貯蔵穀物、牛乳を節約するために必要とされた。ジャガイモは、人間の食糧となるほか、馬の餌としても役立つ。というのは、カラス麦はもうないからである。それに、ドイツは、オーストリアの飢えた盟友にパン穀物数十万トンを通せざるをえない。ドイツでも不足が支配しているのに。

こうして、途方もない豚殺しが始まった。豚小屋は空になった。人々は、好物の豚肉なしの将来に、ぞっとしながら思いをはせた。気分はとても暗く、それに濃い霧が毎日この地域に立ち込めていた。毎夕、毎晩、鼻水がたれ、朝、午前には、それが凍った。よい靴がなく、わら靴や布地の靴で済まざるをえない人々は、ほとんど絶望におちいった。

【闇製粉と「帝国薄口ビール」】 1月22日、軍の休暇がすべて止められた。同時に鉄道交通の制限がなされた。一連の列車は運行をやめた。それとともに、ひとりで、無数の請願も小休止に入り、その製作者たる教師も一息入れることになった。彼らは、この請願製作でとても実入りのいい仕事をしていたのである。農民の心にいっそうこたえたのは、穀物・ジャガイモ・干草・わら・牛乳の差し押さえと供出に関する厳しい規定であった。隠匿をこれまで通りし続けることは困難だった。製粉所のコントロールが強化された。闇製粉と都市からの買出し人に粉を個人的に売るとは、危険になった。〔…〕

しかし、この目も見えない政府は、全く理解がない。豚が殺されなければならなかったとは、ひどいことだった。しかし、いささか機転さえ利けば、闇でほふることはできた。製粉所がとても厳しくコントロールされたのは、もっとひどいことだった。しかし、かねとうまい言葉と引き換えに製粉所にかかなりの袋を隠させることはできた。そこまで法律の目が押し入ることはなかった。しかし、個々の農民が1918年に80～100キロの大麦しかビールの製造にまわせなかったこと、酒場の主人が、ようやく夕方6時半にビール樽の口を開け、個々の客にはその帝国薄口ビールを2杯しか出してはいけないということは、耐え難いことだった。こうして、戦争はついに負けたかと思われた。というのは、いったい、これでは誰が勝利の攻勢を遂行するのか？ 誰がヒンデンブルクのために戦闘計画を立案するのか？ 誰が帝国宰相の相談に乗り、誰が仮講和条約を確定するのか？ 誰が新しい民主主義的な綱領を展開するのか？ もし、長い夜に暖かい暖炉の周りの腰掛、ビールの席でするのでなければ。いったい当局は、あらゆるよき霊から見放され、自らドイツの櫛に斧を入れるのか？ 多くの酒飲みの祖国の友は、深い悲しみを抱き、ふくれ面をし、総じて居酒屋にはもう行かなかった。」(69ff.)

この日の年代記には、戦時中の教員の待遇改善要求とそれへの司祭の側からの反発、その背景としての「学校勤務の教会下級勤務からの分離」の問題が記されていて興味深い。また、人々の好物の豚肉や「帝国薄口ビール」すらも制限されることになり、それが「戦争はついに

に負けたかと思われた」という敗戦の予感ないし実感へとつながっていることも注目されよう。

〔1918年の永遠の崇拜〕〈2月3日〉一昨日、「永遠の崇拜（Ewige Anbetung）」が執り行われた。前夜、エービングの第12歳〔満11歳〕以上のすべての人々が告解場の中に座っている司祭3名に自分の罪を告解し、当日には聖体拝領を行った。彼らは、大いなる敬虔な心で行い、祈祷の時もとても熱心に参加した。じっさい、戦士の妻たちは、夫のことで大きく重い心配を抱えていたのである。フランスでの流血の大攻勢を人々は焦燥の念で待ち受けていたが、この攻撃は、妻たちを寡婦に、子供たちを孤児になしえるのだから。それゆえに、人々は、外地にある者の運命を、ご自身がはらからのために生命を犠牲にされた方〔キリスト〕の心に預けたのである。締めくくりの行列には、5名のフランス人捕虜も参加した。しかし、彼らは、必ずしも人々の心を高めるようには振舞わなかった。直接的な怒りを避けはしたけれども。ろうそくはとても高く、もうほとんど調達できないけれども、村はとてもたっぷりと華やかに光で飾られた。たそがれ時にパンの形をとって歩み来る救い主が近づくと、窓辺には、何干という光がぱつと輝き出した。そしてこの光景は、ドイツでは、フランスの首相ヴィヴィアーニが主張しているように、ろうそくや天の光が消えてしまったわけではないことを、フランス人捕虜に示したのである。』（73）

〈2月10日〉「先週、村長、地方警察官、村外の人2名から成る委員会が、穀物・わら・干草の貯蔵量を正確に確認するために、家から家へとまわった。エービングには、まだ約240ツェントナーのライ麦と多くの干草やわらがあった。もちろん農民は、なおかなりの量の穀物を安全な場所に隠しており、多分それは正当である。というのは、1918収穫年が、どういう結果になるかは、誰にわかるというのか？そして農民に何もなければ、誰が農民に何かを与えようか？都市には戦争中、スイスやリンブルクのチーズ、あらゆる種類のスープの具やその他の食料品が気分転換に供されるのに、農村にはそうしたものはほとんど何もはいてこない。

2月3日から10日の週は、全国で金購入週とされた。〔…〕エービングでは、郡庁が司祭に、その聖堂区で金を集める、ないし集めさせるという不愉快な任務の栄を与えた。司祭も若干の努力はしたが、成果はほんのわずかだった。4名の婦人や乙女が、耳輪4、指輪2、ブローチ3、胸にかける十字架1を持参した。しかし司祭は、これらのものも全く本物ではないか、ただ薄く金メッキされているだけかと疑っている。けれども、司祭は、それらをシュタッフエルシュタインの当局に差し出した。本物の金製品は、農民のもとでは、マイン川の砂の中の砂金のようにまれである。こうした物でも、農民層は、目端の利く都市の宝石商のカモなのである。〔…〕」（73f.）

〔ウクライナとの講和条約〕〈2月11日〉「土曜日、2月9日、新聞はうれしい知らせをもたらした。「今朝2時、ウクライナとの講和が調印された！」と。この世界史的事実は、当然予期される歓喜を呼び起こさなかった。

無数の失望に終わった希望をともなった長い戦争は、大半の人々をこうした報道に対して全く鈍感にさせた。それに、人々は、ロシアが戦闘不能となっても、アメリカ、イギリス、フランスが、戦争を継続するだろうと知っている。さらに、人々の心は、絶対確実に迫っていると信じている西部での大攻勢への怖れで満ちているのである。

しかし、ウクライナ、この、ドイツよりも大きく、家畜や穀物に満ちた新国家と結ばれた講和は、全く巨大な出来事、敵に対するドイツの最初の切り札、あらゆる実証された英雄精神と忍耐への最初の報償、総じて世界平和の黄金の曙光である。

今日、月曜日の昼、電信は、ロシアとの仮講和条約が締結され、ルーマニアとの講和が接近したという、さらなる報道をもたらした。この知らせは相当の喜びを解き放った。というのは、今や、東部戦線は自由になり、西部でのドイツの最終的勝利が保証されたからである。この報道は、つむじ風のように家から家へと飛び回った。〔…〕今や、ロシアのユダヤ人講和交渉者は、その奸計や策謀で何も達成せず、ヨーロッパを革命化しようというその不埒な賭けに敗れたのである。そのぎりぎりの時でもあった。というのは、さもないければ、ドイツの鋭い剣の切れ味が再び験されたであろうから。

それに、この平和の知らせが完全に展開しえなかったのは、今日午後、4年間の中断の後、再び立派な農民の結婚式の行列が教会へと歩みを進めたからである。教会は満席だった。こうして特に若い娘たちには、見たり話したりすることが一杯で、ロシアとの講和締結などはほとんど邪魔にしか思われなかったのである。」(74f.)

〈2月20日〉「ロシアとの講和の締結は、中身の無い殻だったことが判明した。ユダヤ人のロシア代表〔トロツキー〕は、真の平和を考えていなかった。この幻想家、イデオログは、日ごと毎日ドイツとオーストリアにおける革命の勃発を待ちわび、そこでこれらの国々の外交官を翻弄した。革命の勃発があまりに長引き、ドイツがイエスカノーカを迫ったので、アブラハムのすれっからしの息子は、ドイツとはたしかに戦争はないが、平和もないと宣言し、ペテルスブルクに戻った。そこで、ドイツ人は、農民までもが、青筋を立てて怒り、2月18日、ロシア戦線のドイツ軍部隊は前進し、デュナブルク〔ドヴィンスク〕、ブクを奪取、ペテルスブルク北部では艦隊攻撃で脅かした。これは、エービングの人々の気に入りに、そして彼らの思う通りになるなら、総じて全ロシア人、特に全ユダヤ人が絞首刑に処せられなければならないかったらう。

〔国王夫妻の金婚式〕 こうした、暗く不安な時に、バイエルン国王夫妻ルートヴィヒ3世とマリー・テレーゼの金婚式が祝われた。バイエルンの全国民は、国王に忠実で感謝の念をもちうる限りは、統治者の金婚式に心の底から関わった。現下の深刻さから、にぎやかな外面的な祝祭は禁じられた。祝賀は、それを受ける陛下の希望で、ミサの催しと児童福祉のための基金の設立に限られた。バイエルン国民は、王室への愛と忠実さの表現で自らの予想をも上回った。900万マルクのかねが祝賀の受け手の自由な利用のために、国の寄付として献じられた。そのためにいたるところで、この類まれな幸せの出来事の記念として各地で寄進がなされた。それは、何百万を数えた。もとよりエービングでは、とても控え目であった。戦時に叢生した農民の利己心は、財布のひもを締めさせた。そこでこの500名を数える村は合わせて15マルクしか出さなかった。司祭は、村の名譽を幾分なりとも救おうとして、50マルクをそれに足した。計65マルクは、バンベルク大司教に送られた。大司教は、記念祭の思い出のために、孤児の教育施設を起こそうと望んだのである。

その前夜、2月19日の夕方、エービングの鐘がバイエルンの至る所と同じく、15分間、祝いの開始を告げて鳴った。当日、つまり今日の朝9時、祝祭ミサがあり、^{グマインデ}聖堂区民はほとんど全員やってきた。司祭は、金の銀梅花の花冠の中の戴冠の夫妻像に向かって熱烈な祝賀の演説を半時間にわたって行った。それに盛式ミサと〔神を賛美する〕テ・デウムが続いた。次いで、学童と村当局、また消防団と在郷軍人会の小さな祝賀行列が行われた。輝く陽光がこの日、天から降り注ぎ、愛する国王を心から喜ぶ全バイエルン国民を喜ばせた。しかし、エービングの人々は、午後、來冬のために薪を準備すべく森へと向かった。その男たちを遠ざけている戦争のかくも痛ましい背景からすれば、これ以上よいどんなことができたというのか?」(75ff.)

〔Ⅲ〕 西部大攻勢から帝国の崩壊へ

〔1918年春の気分状況〕 〈4月2日〉「ドイツが1918年3月に過ごした人を興奮させる日々は、不思議なことに、村人の顔にあまりに深いしわを刻むことはなかった。まことに奇妙! 外の大世界では、大いなる神が何世紀にも及ぶ歴史をつくり、ロシアという巨大な国家が、全能の手に触れられて、積み方の悪いレンガの山のように崩れ落ちた。3月3日、大ロシアの残部との講和が、まださしあたり仮講和でしかなかったが、成立し、3月16日、それに真の講和が続いた。これにウクライナとの講和条約が続いたが、この国家には、歴史に通じている者のかなりが、バラ色の未来や長期の存続を予言しなかった。ルーマニアは、中欧諸国と講和交渉に入ることを余儀なくされ、かなりの切れ端を引きちぎらせざるを得なかった。潜水艦作戦は、ますます激しい勢いで荒れ狂い続け、イギリスとアメリカを震え上がらせている。

エービング村では、すべてが、あたかも外では何も起こっていないかのように、普通の歩みを続けた。

天からは、3月を通じて、太陽が、すばらしい花にみちた早春を魔法のごとく出現させ、王としての力をもって光り輝いた。畑には、人と家畜が群がり、大麦とカラス麦の種が土にゆだねられた。老人、しかも80歳までの老人、老若の婦人、乙女や子供が、この日々は何を成し遂げたかは、末代まで農村民の誉れたり続ける。しかも、彼らは、それが当然のことであるかのごとくに、平然とそれをなしたのである。東部の講和の報道を、彼らは信用しなかった。彼らはあまりにしばしばたぶらかされてきた。そして、西部、フランスでの迫り来る大攻勢のために、恐れと心配の中にある。銃後の守備隊や兵站の全部隊が、最年少の1899年次を除いて、戦場へと赴いた。そこからの休暇、そして郵便までが差し止められた。食料品が入った野戦郵便小包も、出征兵士に送ってはならないとされた。ついに3月21日、とうに待たれていた西部でのドイツの攻勢が始まった。ペロンヌ、バポーム、ロワ、ノワイヨン、モンティディエが奪取され、英仏軍は打ち負かされ、8日間に7万名の捕虜が出、大砲1,100門と果てしない戦利品が獲得された。当初、かなりの人が、戦争の速やかな終結を考えた。特に、電信が、パリが120キロ離れたドイツの大砲によって砲撃されたという、信じがたいほどの知らせをもたらしたので。しかし、10日目には、ドイツの前進は行き詰まり、イギリスの主要な拠点たるアミアンとアラスは奪取しえなかった。コンピエーヌもまた。これは、春の夜の霜のように作用した。不思議なことに、受難週は、全く予期に反して、3月26、27日の両日、寒い夜をもたらし、気温は零下12度まで下がった。

銃後および戦地での国民の食糧に関する深刻な報告も、興醒めの作用をした。陸軍の全馬匹の40%が適当な飼料の欠如のために死んだ。軍当局によって干草1ツェントナーに14マルクが提供された——前代未聞の価格。加えて、穀物の厳しいコントロールと自家消費者の穀物割当ての月17ポンドから13ポンドへの切り下げ、買出し人や閤買占め人への措置の強化があった。エービングでは、パン穀物の供出を拒否した農家から穀物が地方警察によって力づくで取り上げられた。この全く利己心で固まった家族は、3名の独身のきょうだい、男子のE.G.とその二人の姉妹から成っている。

[...] 3月18日、第8次戦時公債(5%と4 1/2%)の応募が始まった。エービングの人々を熱心に応募するようさせるために、ヴェルフエル司祭は、バンベルクの銀行家のオットー・シーレ [1875-1958] に、^{バルムゾンターク} 枝の主日、3月24日、グローの居酒屋での講演を依頼した。多くの男性、婦人、乙女が出席した。弁士は、すぐに人々の心に入り込み、公債の安全性に関する人々の疑念を吹き飛ばすことをわきまえていた。そこでかなりの人が、かねを必要としている祖国にエービングからも援助の手を差し伸べる気になった。復活祭は、待たれていた雨をもたらしたが、攻勢の犠牲に関する最初の報道ももたらした。この間、歩兵のニコラス・アイアーマン [1898年生れ] の負傷が伝えられた。右腕を貫通されたという。

復活祭自体は、新たに目覚めたキリスト者としての喜びと無数のハレルヤをもって祝われた。国民は、その救い主に即して、勝利へ、生命へと導くのは、血と汗、労苦と涙の道だという古来の真実を学んだ。] (77ff.)

<4月21日> 「世界大戦という荒天における空の青のように、^{デア・グァイセ・ゾンターク} 白衣の日曜日、金色の陽光のもと、子供の聖体拝領をともなって花開いた。[...] 聖堂区全体が、小さき者の敬虔な心と無邪気で聖なる喜びによって心を高められた。遠くにいる愛する人、初聖体拝領者の父親や兄弟に大いに思いをさせ、かなりの者が熱い憧憬の涙にくれた。

[委員会が家畜を差し押さえる] 次の週、4名から成る委員会が、何らか不可欠ではない家畜〔牛〕を差し押さえるために、厩舎から厩舎をまわった。100頭が差し押さえられ、例外なく若い家畜だった。農民が、強い言葉でこの干渉に抵抗したことは、自明である。しかし、もっと自明だったのは、すべての抵抗が無駄だと判明したことだった。というのは、何百万もの貧しい人々が、かしこでは飢えて食糧を求めているからである。しかし、若干の農民にとってより腹立たしかったのは、委員会が一連の豚を見つけたことだった。それらは、隠匿することができず、ぶうぶう鳴いたのである。3月1日の家畜調査の際は申告せず、したがって、ひそかに保持し、闇でほふるはずのものであった。これら何も知らない剛毛の獣〔豚〕も容赦なく押収され、とても低く支払われた。[...]

農民にとっては、こうした、ないしはその他多くの経営への介入は、ひどすぎることであった。この永遠の委員会を自分の家屋敷から遠ざけておくために、農民は、「よくかみつく犬と弾丸敷設」と書いた、

ホウロウ加工したブリキ板の表札を掲げた。しかし、委員会は死をも怖れず、屋敷に踏み込んだのであった。」(81)

〈6月13日〉「32年前の今日、シュタルンベルガー湖で、バイエルン国王のドラマが演じられた。才能に恵まれ、熱愛された、そして運命の暗い定めで狂気の闇に陥った国王ルートヴィヒ2世は、青いアルプスの湖の波間で、死神の腕の中へと飛び込んだ。それ以来、ドイツの相貌は、内外に向かっていかに変貌を遂げたことか！

相変わらず、戦争は流血の殺人軌道を進み、相変わらず合葬墓が敵地に掘られ、長い負傷者列車が不安にさいなまれた故郷へとレールの上を走っている。ラオン、ノワイヨン、バポーム、アラス付近での攻勢は、強化されつつある敵の抵抗で行き詰まり、それとともに、赤々と燃え上がった平和の希望の火種も、再び消えてしまった。イーペルン付近の攻勢がこれに続いた。ケンメルベルク山はドイツ軍の手中に落ちたが、勝利の代償は高かった。何千というバイエルン人同胞にとって、この山の斜面が永遠の休息の地となった。

エービングは、死者こそ出さなかったが、独身のペーター・ベヒマン [1878-1923]、この30台のパウアーは、榴弾で右腕を失った。ケンメルで、イーペルン攻勢は行き詰った。続いて、ヒンデンブルクの比類ない戦略によって、6月初め、攻勢がシャンパーニュ地方のソワソンとランスの間 [...] で行われた。再び、英仏軍は何千という捕虜と何百門もの大砲を失った。3月21日以来、敵側の損失は、捕虜18万名、大砲2,600門、土地4,000平方キロにのぼる。パリ、アミアン、イーペルンが直接脅かされている。それに加えて、恐るべき潜水艦作戦が、世界の海を商船の墓場に行っている。こうしたドイツ潜水艦のアメリカ海岸での浮上とその「はたらき」が報ぜられると、エービングの人々の胸でも、喜びの壟撃が走った。この、近寄りたいたいと思いがっていた、アメリカの嫌悪すべき偽善者共に、特に強力な懲らしめを与えたのである。

〔暴利価格〕 平和には、人々は全く当然のことながら、絶望している！ 彼らはあまりにもしばしばその希望でたぶらかされた。ほとんど誰ももはや「戦時の祈り」には訪れない。あらゆる高級な感情は、国民大衆の中で死んでしまったように見える。物質的なものだけを考え、求め、あらゆる可能なやり方で金もうけしようとしている。食料品の不法な購入は度外れになっている。価格は週を追って上がり続けている。チューリンゲンから鉄道で群をなして到着する買出し人は、エービングで1918年6月初めに、ジャガイモ1ツェントナーに10~15マルク支払い、バター1ポンドは7マルク、カッターチーズ1ポンド1マルク、闇でほふった豚肉1ポンド8~10マルク、ベーコン12マルク、粉1ポンド1マルク50ペニヒした。同様に高いのは野菜で、卵は1個につき30~50ペニヒ払われた。

工業は報復し、その製品の価格を法外な競争心で、恥知らずな高さにまで押し上げている。[...]

洞察力ある者は誰でも、このまま長くは続けられず、激しい混乱が来ざるを得ないと認めた。しかし、誰も暴利を止める先頭に立とうとはしなかった。哺乳豚1対が6月初めに400~500マルク支払われた。かくて、農民が農民の敵として振舞っているのである。

人間がかくも厳しく無慈悲であるので、天もまた厳しい態度を示した。エービングの塔の風見鶏は、ほとんど例外なく北を指しており、そちらから寒風が押し寄せ、雨を降らせなかった。豆は凍り、ジャガイモも一部凍った。穀物は急ぎ足で成熟に向かい、採草地は枯れ始めた。よい収穫の見込みはますます悪くなった。井戸の水は少なくなった。

干草は、乾燥した天気を取り入れがうまくいった。しかし、二番手のクレーや牧草の成長がなかった。乾燥がさらに続き、風見鶏が間もなく西を向かなければ、ドイツ国民の将来はどうなるのか？ 日曜、6月9日、夜、東天にこれまで人間が目にしたことがなく、望遠鏡も見たことのない新しい星がぴかっと光った。それは、わし座の中できらめいた。それは、ドイツとオーストリアのわしにとって、希望の星なのか、不吉な星なのか？ 農民すら、この現象を見上げ、司祭に新しい星辰を示させた。」(82ff.)

〈10月8日〉「戦争のことはもはやほとんど気にかげず、日夜ただマンモンのためにあくせく働いている人々のひどく不快な非キリスト教的態度、前線からの徐々にますます不利となる知らせ、人々の、戦争のいんちきと、懐を肥やすためだけに戦争を行う「大物 (Großköpfe)」とに対する不毛な罵詈雑言、都

市と農村が張り合って、まさに耐え難くなった暴利、そして、ますます脅威的なものとして現れてきている、あらゆる法規の無視は、この書の手書きに不快感と来るべき〔神の〕裁きへの不安な予感を生み出したので、彼はもはや何週間も筆を執る気にはならなかった。それでも、年代記者の注意を喚起するにふさわしい多くのことが、村で起こった。

〔戦争はさらなる犠牲を求める〕 6月16日、シャンパーニュ地方の〔…〕野戦病院で35歳〔?〕の既婚の木工J.L. [1879〔?〕-1918]が死去、寡婦と3名の子供を遺した。彼女は、死んだとなると、とても泣き悲しんだが、生前は、その口の悪さで彼に何時間もつらい思いをさせた。Lは、第2予備野戦砲兵連隊所属で、3年間戦場にあった。エービング村は、通例の葬儀と村の大砲による弔砲で死者を弔った。

7月15日には、ランス地方で26歳3ヶ月の歩兵ヨーゼフ・ヘルツォーク [1892-1918]が頭を撃たれ犠牲となった。彼は、平時には兵役を終えていず、戦争の勃発後初めて入隊し、第5歩兵連隊で訓練を受け、1915年に第9歩兵連隊で戦場に赴き、重傷を負い、治癒後、第24歩兵連隊に転属、そこで彼の命を祖国と義務に捧げた。ヘルツォークの両親は救貧院で死に、彼はそこで成長し、職業はレンガ積み工であった。彼は、家も両親も財産もなかったので、村の農民の間ではあまり重きをおかれなかった。彼の死の知らせが届いた時、多くの者が、彼ら一流の品の悪い言い方で、「ヘルツォークは、その命をかくも誉れある仕方です。閉じたのだから、自分は幸せだったとわかっていい」と言っている。司祭は彼に暖かい弔辞を述べたが、その中で彼は、かくも逼迫した戦時には、前線での勇敢な兵士である方が、銃後での富裕な威張り屋の農民であるよりも一千倍も価値があるということを、農民たちの肝に銘じさせた。

7月にはついに雨天が始まり、あえぎ苦しんでいた畑に生気を与えた。それに再び暑い日が合して、穀物の収穫は、乾燥かつ良好に取り入れがなされた。穀粒の出来は予期に反してとても稔り豊かだった。8月初めにはすぐさま電動機による脱穀が始まった。帝国食糧庁から農民に、8月15日までに供出したライ麦ないし小麦には1ツェントナー当り5マルクの脱穀割増金が与えられた。パン穀物の在庫は、8月1日までには最後の最後まで食い尽くされた。人々が大きな期待をかけていた早生のジャガイモは、全く不作だった。早生の野菜も、神は、飢餓に直面し気をもんでいたドイツを穀物の豊作で償ったのである。

エービングでは、脱穀は8月5日に始まった。7月25日の守護聖人〔聖大ヤコブ〕の祭りは、しきたり通り華やかに祝われた。しかし、真に祝祭的なお祭り気分にはならなかった。あまりに多くの男性が不在だし、人々は宗教的祝日にも、いかなる高尚な感情をも窒息させようとする金もうけの問題に、あまりにかかずりあっているのである。

〔西部戦線での新たな展開〕 全く徐々に、人々がすっかり気づくことなしに、運命の天秤はドイツに不利に傾いた。7月のマルヌでの攻勢は、ドイツ側の完全な失敗に終わった。続く数週間に、1918年春に新たに奪った、フランドル、ピカルディー、ソンム、マルヌ、エーズ、ヴェールでのフランスの領土は、ほとんどすべて失われた。当時、甚大な犠牲を払ってかちえたイーペルン村近のケンメルベルクも、敵に委ねざるをえなかった。〔…〕

何万人もの捕虜、何千挺もの機関銃、何百門もの大砲が、敵地に残された。その他の途方もない軍需物資は別としても、潜水艦艦隊は、蒙った損失のゆえにもはや以前のような好成果を上げなかった。

こうなると、エービングでも、人々は俯瞰的になった。しかし奇妙なことに、人々は、ある種の他人の不幸を喜ぶ気持ちを示し始めた。村の居酒屋政治家は、バイエルンがプロイセンから離れるべきだ、税金を払うのがイギリスであれ、フランスであれ、ドイツであれ、同じことだと叫びまわった。カイザーは首にすべきだ、そうすればすぐに平穏になるとも。帰休兵は、いっそう強くプロイセンと大物たちを罵倒し、悪くて不十分な給養に苦情を言ったが、元気の盛りのように見えた。農民は牛乳をゲマインデ連合にますます少なく供出し、穀物を大量に闇取引・製菓粉用に着服した。彼らは全く眼が見えていなかった。

〔鐘の差し押さえに対する抵抗〕 陸軍省によって大きな18ツェントナーの教会の鐘が差し押さえられ、3週間以内に供出するよう求められた時、そして、司祭が祖国の大いなる苦境に鑑み、それに従うよう勧めた時、全エービングが、老バウアーで、キリスト教農民協会の郡代表者G [ゲオルク]・ホルヒャー [1843.9.6-1919.5.8]⁽¹⁵⁾の指導下にいきり立った。直ちに招集されたゲマインデ集會は、とても厳しい成り行きとなった。特に司祭の方も、のらくらせず、散々こきおろしたので。もとより、彼は、この近視眼

的で犠牲を嫌う大衆に対して、自分を押し通すことはできなかったが。教師の Joh [ヨーハン]・シャットは、村の相談役だったが、全くの抜け目なさから一言も発さず、以下の決定を書き記し、村人^{ゲマインデ}を喜ばせた。すなわち、「^{ゲマインデ}エービング村は、その古さ(600年)の故に免除となったラッテルスドルフの鐘や、その工芸的価値の故に差し押さえを免れたツェップフェンドルフの鐘も下ろされるのでなければ、自らの鐘を差し出すことは拒否するものである」、と。司祭は最後に、「鐘は教会基金の財産であり、政治的なゲマインデ集会ではなく、教会管理部がその運命について判定を下すべきである」と言明した。それでどうなるというのか？ 教会管理部の役員たちは、その会合で同胞市民と同じ考えを示し、こうしてよかれ悪しかれ、司祭すらその長として、文部省に対する抗議を起草せざるをえなかった。

〔ドイツ帝国とバイエルン王国の最後の日々〕 気がかりな知らせが、一撃また一撃とこれに続いた。ドイツの前線での敗北、ブルガリアの裏切りと離反、パレスティナでのトルコ軍の崩壊、ブルガリアの連合国側との休戦、ドイツの敵によるセルビアの再獲得、帝国宰相フォン・ヘルトリックの退陣、ドイツにおける民主主義の勝利。民主主義的考えのマックス・フォン・バーデンが帝国宰相となった。彼は、その活動をアメリカ合衆国大統領に講和交渉の着手を乞うことで開始した。それは、そっけなく言えば、ドイツがアメリカに無条件降伏し、自らの運命を、その敵の中で最もすれっからして、最も賢いこの敵国の手に委ねる用意があるということである。

エービングの多くの人は、ぞっとした。しかしみなは、うまくいかなかった時に、少なくともできるだけ多くのマンモンを手元においておくために、さらにこれまで以上に懸命になって、手にしたかねのすべてを慎重にとっておくこととした。』(84ff.)

バイエルン陸軍省による、エービングの残された大きな鐘の供出命令に対して、当地方のキリスト教農民協会の有力者の指導下にゲマインデ集会が開かれ、拒否を決議したことが注目される。その際、司祭ヴェルフェルは当局側に立って弁舌を振ったが、教師は沈黙を守って書記役に徹し、村人を喜ばせた。ジルハイム村では、戦時公債をめぐってゲマインデ集会が開かれ、教師シュティーゲレは、村長と組んで応募推進に重要な役割を演じており、同じ教師でも、さまざまな動きをしていたことになる。ただし、どちらでも、教師は村の有力者と行動を共にしていたということもできよう。

〈11月14日〉「悲しい、突然相次いで起こった出来事、崩壊、転覆、古来の何世紀もの間結ばれてきた絆の崩壊、大衆的なみじめさ——それは家族内ではいわゆる「スペイン風邪」[インフルエンザ]の病気によって生み出され、本書の筆者もしばしばその鋭い毒牙にかかったが——、人々の物質主義へのいっそう深まる埋没、打ち負かされ11月11日の休戦条件の受諾によって自ら敗北を認めたドイツの最も深刻な屈辱、そしてそれ以上に、11月8日のヴィッテルスバハ王室の恥ずべき粗暴な更迭とそれに続いた11月10日のカイザーの退位は、筆者から、10月8日の最後の記録以降起こったすべての出来事とそのエービングでの反映を書き留める意欲を奪った。そもそも可能な限りでそれを今日行うこととする。

10月1日、帝国政府にドイツ参謀本部の長〔次長〕ルーデンドルフの電信が届いた。その内容は、「直ちに休戦を乞う。もはや前線は48時間もたない」というものであった。帝国議会、宰相、帝国参議院は、この日までずっと西部戦線での転換が近いと信じており、全く仰天した。ドイツの前線では、〔さまざまな〕事が起こり、部隊が活動を拒否したので、全ドイツ主義の鉄のごとき担い手で、宣戦の真の指導的人物ルーデンドルフは、信念が揺らぎ始めた。この電信の結果は、帝国政府の民主化、アメリカ合衆国大統領ウィルソンへの休戦の依頼、帝国宰相フォン・ヘルトリックの辞任、宰相なき時期、マックス・フォン・バーデン公の帝国宰相への任命、ウィルソンの14ないし23ヶ条の将来〔の平和〕の基礎としての受諾で

あった。

もとより、村の人々には、これら人を震撼させる出来事は、ほとんど印象を与えなかった。民衆、バイエルンフォルク農民は、本能的に、国家統治形態の変更は、自分たちの厳しい、労働に満ちた存在をそれほど変えるものではないと感じている。絶対主義的ないし立憲的な君主が上に座しているのがあれ、民主主義がであれ、自分たちはいつも上から、「常二支払ワナケレバナラナイ哀レナ民」としてのみ見られているのだ。そして民主主義とは、個々の野心的な成り上がり者か、金持ちのユダヤ人か、その操り人形以外のものではない。それ故、エービングでも、若干の居酒屋でのらくらしている者のほかは、ベルリンやミュンヘンで嵐がドイツの樹の梢を揺さぶり、その枝を痛めつけても、ほとんど誰も気にならなかったのである。農民は、新参者たちが、都市大衆から高みにまで打ち寄せられてきたが故に、とても農民の友ではないということ、彼らはおそらく、あの、社会民主党を恐れ、その好意を得るために、農民に猫なで声をかけつつも彼らを抑圧した国王の大臣たちよりも、いっそう友ではないということ、はっきりと認識しているのではないにせよ、気づき、あるいは予感している。

しかし、ひとたび時代の風潮がそうとなると、イツ川・メイン川の谷間の人々は、カイザーとプロイセンに全くひどい罵詈雑言を浴びせ始め、その際、バイエルンの国王もプロイセンの友として割を食うことになった。人々は、カイザーも諸国王も、彼らが俸給として得ている何百万を節約するために、解任すべきであるということについて、本当のところなぜかは知らないままに、一致した。この方向で特に厚顔無恥に罵ったのは、軍服を着た、前線帰りの、また、まだ前線に行ったことのない人々だった。一番ものすごい勢いだったのは、18～19歳の新兵たちだった。女性や娘たちも、戦争が彼女たちを政治に、少なくともネガティブの側に成熟させたことを示した。

社会民主主義・民主主義・自由思想派の諸紙、とくにユダヤ人の新聞は、都市と農村における不満を政治の水路に導き、国民に催眠術をかけて、君主制の転覆によって、戦争は終結され、あらゆる害悪が除去されるばかりか、有利な講和が可能とされると国民に暗示することをわきまえていた。これは、おそらく、この戦争全体を通して最大のいんちき、国民の瞞着であった。というのは、国民の不満は、欠乏、すなわち、十分なパンや、肉、牛乳、タバコ、衣服の不足に最も深い原因があり、政治化、民主化、共和国の必要は、ほとんどの者にはなかったのである。少なくともエービングの人々は、しっかりとますます強く暴利をむさぼり続け、そして彼らもまた、都市民によってますます強く暴利をむさぼられた。彼らはバンベルクにより少ない牛乳を供出し、そしてそれだけいっそう勤勉にバターを製造して、闇商人や買出し人にべらぼうな値段で売りさばいた。農民に聞くと、彼らはほとんど全くジャガイモを植えつけず、したがってゲマインデ連合にごくわずかしか1ツェントナー5.50マルクで供出できなかったが、バンベルクの私人にはツェントナー当たり8～12マルクで何台も供給した。豚が闇で大量にほふられ、おそらく子牛や若牛もそうされた。肉は、途方もない価格で愛好者を見出したが、世間では少しも気付かれなかった。

しかし、人々はこうした仕業が長い間にはよいことはなく、転覆をもたらさざるをえないと予感しており、そうした時代に備えていた。同時に、敵がボヘミアとティロルからバイエルンに侵入するという暗いうわさが家から家へと伝わった。自分たちのドイツ軍・バイエルン軍の抵抗力はもはや何ら信じていなかった。それ故、彼らは、できる限りかねを溜め込んだ。ごく短期間に銀貨全部とすべての多額紙幣が消え、箱に詰められて注意深く隠され、埋められた。人々は気が狂ったように見えた。

ルーデンドルフは、プロイセンのユンカーや全ドイツ派とひそかに結んでいたが、10月11日ベルリンに来、これらのグループとカイザーのもとで危険な計画を推進した。帝国議会は閉会させ、ルーデンドルフの軍事独裁を宣言すべきだというのである。しかし、ヒンデンブルクが、將軍は行を共にしても、軍全体としてはその忠実な協力を期待しえないと指摘して、この一揆を阻んだ。こうして、カイザーはこの危険な歩み——それは革命の即時勃発をもたらしたであろう——に踏み出すことを拒否し、ルーデンドルフは、ドイツ軍の兵站總監の地位を解任された。しかし、ドイツの運命は確定された⁽¹⁶⁾。

エービングでは、10月15日、まだ満20歳にはなっていない若い兵士、バイエルン電話部第34の電信士ヨーハン・シュナイデヴィント [1899-1918] が10月8日にシャンパーニュ付近の戦闘で、榴弾の破片を頭に受けて重傷を負い、真夜中に死去、セダン近くのヴルク村の墓地の合葬墓に葬られたという知らせ

農村司祭の第一次世界大戦「年代記」(1917～18年)

が入った。彼は、出征した者すべての中で、最も健全で最もはつらつとした人物だった。なお存命の両親と二人のきょうだいは、戦死者を思い泣いた。エービング村は、追悼のミサで彼にふさわしい榮譽を手向けた。

郡内に反抗精神がますます目立ってきたので、また、第9次戦時公債の応募が芳しくなかったのも、司祭、教師、市町村長は郡長によってカルテンブルンに招集され、その助言を求められただけでなく、愛国的な意識をもって活動をするよう働きかけられた。人々は、金銭欲があらゆる高級な感情を窒息させていること、軍が戦争に倦んでおり、戦争による道徳的被害は途方もないものであることで、意見が一致した。一人のプロテスタントの牧師の報告によれば、彼の教区では収穫感謝祭に参加したのは3名〔だけ〕であった。「かねは十分にある。神様は必要ないだ」、というわけである。食糧供出の義務を思い出させたり、鐘の供出を擁護した牧師・司祭たちのミサは、^バ教区民・^キ聖堂区民によってボイコットされた。総じて、この集会では、聖職者に対する空気が悪く、愛する神と司祭たちにとって不利な時代が始まろうとしていることが示された。集会の効果は、ゼロに等しかった。

【インフルエンザ】世界の導き手は、しかし、自分にほとんどわずかしか問うことのない人類と愛するドイツ人とに、天使を、もとより平和の天使ではなく、伝染する病気の姿をとった陰鬱な死の使いを送った。それは、不気味な速さで都市と農村を飛び回り、その翼が撫でた者は、元気も力もなく寝床に横たわって呻吟し、激しい頭痛、腹痛、腰痛、手足の痛みにあえいだ。それにつらい咳、かすれ声、高熱、食欲不振が加わった。多くの場合、病いは肺炎にまで至り、それはほとんど死をもたらしした。エービングでは、10月24日以来、ほとんどすべての学童が「インフルエンザ」——とその病気は呼ばれたが——で床に伏し、16歳の農家の娘マリー・シュテーセルは、[1918年10月31日に]司祭手ずからの聖なる死の秘蹟を受けた直後に死んだ。不思議なことに、エービングの司祭が最初のインフルエンザ患者であった。はるかに不吉なことに多数の死者を出しつつ病気が荒れ狂ったのは、周辺のゲマインデ、すなわち、ブライテンギェスバハ、ラッテルスドルフ、ミュルスバハであった。しかし、エービングも、一時は野戦病院に似通い、多くの家庭では、全員が、この14日間も続いた病気で、床に伏した。

しかし、この流行病で改心した者は誰ひとりいなかった。暴利、うそ、いんちきが依然として地歩を確保していた。

【転覆】日曜日、11月3日、エービングの司祭は、聖堂区民に「我々は革命の前夜にある。人々は分別を受け入れるべきである。さもないと、都市での飢餓と農村の略奪がそれに加わることとなろう」と告げ知らせた。すると聴衆は笑い、「司祭はまた縁起の悪いことを言っている」と言った。

そのすぐ後、新聞は、11月4日と5日にキールで艦隊が反乱し、市全体が騒ぎの張本人の手中にあると報じた。エービングでは、人々は、興奮させる報道をともなった4年以上にわたる戦争の出来事で鈍感になり、この知らせをととても無関心に受け止めた。しかし、カイザーがあらゆることに責任があるとして、彼を罵倒し続けた。次いで、11月8日、新聞は、その前夜、ミュンヘンで君主制が打倒され、国王は首都から逃亡し、共和国が宣言されたと報じた。人々は不審げに頭を抱え、当初は、エービングにもフランケン地方の他の村々にもこうした変更の必要性がないが故に、こうした事実はありえない、ないしそれは一時的な一揆であるとみなした。人々は、刷新が社会民主党に発していたので、いっそう、刷新に不信感を向けた。そして、元のヴィッテルスバハ家の国王に反対して、外国のユダヤ人〔クルト・アイスナー〕をバイエルン国家の指導者として戴いたことが知れ渡ると、転覆に腹を立て始めた。その頃、かなりの数のエービング出身兵士がとうとうと故郷に向かい、賜暇兵はそのままくに留まった。しかし、みながドイツの肩章をはずし、ただ帽子にだけ真っ赤な布切れか赤いぼろきれを着け、幾人ものボタン穴には赤い小さなリボンがかけてあり、これら「ドイツの戦士」たちは、老練の年輩者が青筋を立てて怒るような演説をぶった。これら祖国の裏切り者や脱走兵士は、大半が19～20歳の若者で、敵を見たことがなく、社会民主党に扇動されたのであった。彼らは、戦場や兵站基地から、良心のとがめなしに略奪し盗んできた、毛皮、長靴、羊毛、毛布、衣類といった必需品を重く携え群をなして帰郷した。人々は、敵がドイツの防衛能力の欠如を利用して、前代未聞の厳しい休戦条件をドイツに課したと知って、ドイツ人であることを恥じた。最も愚かな農民にも今や、まさに休戦について交渉し始めた時に開始された革命が——カイザー

も退位していた——、ドイツ国民への途方もない、もはや償いえない犯罪であり、侮辱、恥辱、不名誉をドイツに転嫁するものであったということが明らかであった。いかなる規律をも失い、ドイツを敵に無条件降伏させた兵士のまさに常軌を逸した浅ましい態度がますます分かってきた。いたるところに兵士、農民、労働者の評議会（レーテ）が形成されたので、エービングでも農民・労働者評議会が設立されたが、ありがたいことに、設立されたという以外は、何も聞かれなかった。評議会は、エービングでは紙の上でのことにすぎなかった。

開戦の時期に召集された兵士 G. H. [1891-1955] は、のちに戦場で負傷したが、1918年2月休暇を利用して結婚した。しかし、結婚後すぐに彼は再び第2予備歩兵連隊に配属され、戦場行きを命じられ、エルザスのヴォーゲゼン山地の塹壕に赴いた。そこで彼は、革命を共にし、彼の連隊ととも故郷に行進しようとした。彼の大隊は、〔エルザスの〕シュレットシュタットで同地の食糧倉庫を略奪した。市民も略奪に加わった時、軍民の間で衝突が起こった。シュレットシュタットの市長は、ドイツ軍の後についてきたフランスの胸甲騎兵（約80名）に電信で救いを求めた。彼らは、全大隊、したがって、わがエービングの英雄 G.H.をも捕虜とし、かくて、彼の若妻は苦悩にさいなまれることとなった。

12月初め⁽¹⁷⁾、無事難を逃れた同連隊の2大隊が、偶然にもエービング一帯で動員を解除された。エービングには、この連隊の迫撃砲部隊が約14日間宿泊し、徐々に解体された。そこで、人々は、シュレットシュタット事件の詳細を聞き知り、兵士たちの完全な粗野化と完全な道徳的崩壊を確信することができた。ラッテルスドルフでは、この第2予備歩兵連隊の機関銃部隊が動員解除され、それには約3週間かかった。待降節に当たっていたが、ほとんど毎日ダンスがあった。ラッテルスドルフの娘たちの世界は、次第に常軌を逸してしまっただけでなく、何人かのエービングの乙女たちも、誘惑にかたず、このオルギアに参加した。

12月21日（月曜日）、エービングの戦死者19名が、荘重な葬儀のミサで追悼された。司祭が追悼演説を行い、前夜のミサ、死者のためのミサを行った。この涙にみちた式には全村民が参加し、すでに帰郷していた戦士たちは音楽とともに行進してこれに参加した。

聖夜には、愛しい幼子キリストが自分の小さなベッドをきちんとしつらえ、クリスマス第一日には風景が雪におおわれていた。この日、兵士たちの帰郷にもかかわらず、まともなクリスマスの喜びはわきあがらなかった。夢魔が心にのしかかっているかのようなようだった。

12月26日、教会での出征兵士の歓迎式典が、祝賀演説とテ・デウムをとともなう盛式ミサで行われた。聖職者にとっては、悲しい現在を忘れるような仕方での「英雄」たちの英雄的行為にまともな光をあてることは、たやすい任務ではなかった。」(89ff.)

上記の一節「休戦について交渉し始めた時に開始された革命が——カイザーも退位していた——、ドイツ国民への途方もない、もはや償い得ない犯罪であり、侮辱、恥辱、不名誉をドイツに転嫁するものであった」(95) というのは、「七首伝説」につながるものであるが、ここでは、革命の開始にカイザーの退位が先行していたという致命的ともいえる誤りを含んでいることを指摘しておくにとどめる。他方、「敵がボヘミアとティロルからバイエルンに侵入するという暗いうわさが家から家へと伝わった」(91) という記述は、シュティーゲルの日記とも照応するものであり、この関連では、「農民にとっては、その利害状況から、平和をもたらす革命の価値は、労働者にとってよりも大きかった」という、農民評議会（レーテ）に関する同時代の研究者マッテスの指摘⁽¹⁸⁾ が想起されるべきであろう。人々が「カイザーとプロイセンに全くひどい罵詈雑言を浴びせ始め」た(90) という記述も、シュティーゲルの日記に登場する「バイエルンは自立する」といううわさともども注目に値しよう。

おわりに

ヴェルフェルの年代記はまだ続いている。その中で、大戦下のエービング、また戦争体験が戦後にもった意味にも光を投げかけてくれる、いくつかの点を上げておこう。

(1) 1919年1月12日のバイエルン邦議会選挙に向けた、1918年12月19日のエービングでのバイエルン国民党(Bayerische Volkspartei)〔バイエルン中央党の後身。ふつうバイエルン人民党と訳される〕の信任者集会で、[オーバーフランケン県リヒテンフェルス郡] プーフ・アム・フォルスト村のプロテスタントの村長を候補者とする案に対して、ヴェルフェルは強く反対し、結局、リヒテンフェルス市のカトリックの大工の棟梁ハンス・ディロルを立てることで合意が得られた^(99f.)。選挙では、ディロルが261票を得て、社会民主党17票、農民同盟5票、ドイツ国民党2票を圧倒した。ヴェルフェルは、続く1月19日のドイツ国民議会選挙でも、バイエルン国民党の選挙集会を2度招集するなど、選挙活動に取り組んでいる。なお、この選挙では、バイエルン国民党が、議会の過半数こそ失ったが、180名中66名を占め、第一党の位置は確保することができた(99f.)。また、この年の6月に行われたエービングのゲマインデ選挙では、^{デュルガーマイスター}ゲマインデの長をめぐって131票対126票という大接戦が演じられており(119)、国政レベルではバイエルン国民党支持で一致していても、ゲマインデ・レベルでは厳しい対立があったことになる。このことは、ゲマインデ・レベルでのバイエルン中央党/バイエルン国民党とバイエルン農民同盟との対抗を考える場合にも、留意しておくべきことであろう。

(2) 「社会民主主義」に関するヴェルフェルの指摘は注目に値する。彼によれば、「社会民主党は、農村で恐るべきほどの増大を遂げた。多くの若い兵士、そして戦争でひどい経験をした者みな、同党を支持した。民衆学校教師の宣伝がこれに加わった。彼らは、聖職者による監督が消滅したので、しばしば同党のために宣伝活動をした」(100)。そして、バイエルン・レーテ共和国に関する記述の中では、以下の指摘がなされている。「多くの農民がひそかにラディカルな社会民主主義者に共感していた。「分割」によって、司祭の聖職禄や教会基金、ないしは大きい方の農民の土地を得ようと望んでいたのは、小ギュートラーであった」、と(115)。そして、1920年1月19日、聖セバスティアンの日、在郷軍人会の旗を掲げた行進は、5名しか参加しなかった前年とは打って変わって、全員が誇りやかに参加した。ヴェルフェルは、こう続けている。「革命は多くを、大きなことを約束した。しかし、苦い、恐ろしいことしかもたらさなかった。国民の失望は途方もないものだった」(125)。ここに指摘されている、民衆が革命に向けた希望の問題は、革命、さらにはレーテ共和国と農民の問題を考える際の重要な検討課題の一つということができよう。

(3) 農村における社会民主党支持者の問題とも関連して、次の指摘が注目される。すなわち、

「ドイツの敗北を、エービングの戦争参加者〔出征兵士〕も、カイザーや国王、またお偉方のせいにしていた。将校の物欲、放埒について彼らが語るのを聞けば、また、将校たちの物質主義的な心根や非人間的な兵士の扱いについて話すのを耳にすれば、彼らが間違っているとはとても言えない」(103)。ヴェルフェルは、これに続けて、「ドイツ国民の上層が道徳的墮落を病み」、「国民大衆も物質主義的に汚染されている」と持論を展開するのだが、少なくともここには、敗戦に関する「七首伝説」とは別の見方が示されているといえよう。そして、この点では、次の記述も注目し得る。1919年4月21日、ヴェルフェルがグローの居酒屋で、レーテ共和国に対する義勇軍^{フライコール}への参加を呼びかける集会(弁士はバイエルン国民党邦議会議員ロートマイアー)を催した時、同日、これに対抗するピラが出されたが、そこでは、冒頭、「アイスナーがいなかったら、戦争はなお1年間続き、まず百万人が徴発され、みなごろしにされたであろう」とあったという(1919年4月24日付)(112f.)。「七首伝説」については、こうした同時代史料のいっそうの渉獵とその分析が求められているというべきであろう。

(4) 食糧統制経済は戦後も続き、「闇取引、暴利、買出し行為は、真っ盛りだったので、手元には以前よりもかねがあった。[...] 不快に感じられたのは、牛乳の恒常的なコントロール、若い家畜〔牛〕の頻繁な強制的供出によって不十分な最高価格のために農民が大きな損失をこうむること、農民が買わざるを得ない物品の価格がたえず高騰していくこと、巨額の賃金にもかかわらず少ししか汗をかかない多くの国家・都市労働者の怠惰であった」(1919年7月3日付)(118)。同年3月25日付にも同様の記述があるが(106f.)、そこには「社会主義政府によって法的に導入された8時間労働日を大いにののしった」とある。

この間、都市だけでなく、農村にもダンス熱が広がった。ラッテルスドルフでの「オルギア」(96)についてはすでに見たが、エービング自体では、謝肉祭の時期にも、公然と踊ることはまれで、家の中でのダンスに限られていた。しかし、謝肉祭最後の懺悔火曜日に催された居酒屋モルゲンロートでの公開のダンスパーティには、村人がこぞって参加し、老女たちも若い時の技に挑戦した。「あまりにも長い間、苦勞に満ち、苦勞を背負ってきた人々は、粗野な喜びをなして済ませてこなければならなかったのである」、とヴェルフェルは付言している(103f.)。そして、1919年4月21日の上記集会の集まりは悪く、出席者は年輩の者か、乙女が若干だけで、婦人の姿はなく、「若者は全く来なかった。彼らは、集会の始まる夜7時に大声を上げわめきたてながらラッテルスドルフへと向かったが、そこでは、音楽会とコミカルな出し物とダンスがあった」のであった。(112)

教会の祭は、すでに見たように戦時中も続けられていたが、1919年7月25日、教会の守護聖人記念祭が、きわめて華やかに執り行われた。今回は出征兵士も加わり、「不安や心配、恐怖もなしに祭を祝うことができた。残念なことに、外地で打ち倒されて横たわる19名の男が欠けていた」(120)。詳細につづられた、この祭と二日後の教会開基祭の様子(120ff.)は、こ

ここでは割愛せざるを得ないが、司祭自身の手によるカトリックの祭の記述は、本書の大きな魅力となっている。

最後に、ヴェルフェルのその後を略記しておこう。1921年、エービング在郷軍人会の戦士記念碑設立を支援、1924年、バンベルク農村部の首席司祭に就任、1928年10月8日、エービングからオーバーフランケン県リヒテンフェルス郡モッチェンバハ村の聖堂区司祭に転じ、翌1929年11月16日、同地で死去。享年66歳。なお、甥のハンス・ヴェルフェル(前出)は、ヴェルフェルらの呼びかけに応じて義勇軍に志願した、数少ないエービング関係者の内の一人であった(他は、27歳の神学博士候補ヨーゼフ・メルツバハー〔前出〕と、ハンスと同じ17歳のギムナジウム学生ルードルフ・シュテーセルで、いずれも学生だったことになる)。ハンスは、1922年にバンベルクのギムナジウムを卒業後、ミュンヘンとヴェルツブルクで法学を学び、1929年結婚、バンベルクで弁護士を開業し、バイエルン国民党の一員として活動した。1943年10月、「国防力破壊」のかどで逮捕され、1944年7月3日、プレッツェンゼーで処刑された(17ff., 113f.)。第三帝国におけるその軌跡は、バイエルン地方教育界で上昇を遂げたシュティエグレとは、鋭い対照をなしている。

注

- (1) *Ebinger Kriegschronik. Die Aufzeichnungen von Landpfarrer Johann Wölfel (1863-1929)*, bearbeitet von Elmar Kerner, Bamberg 1999.
- (2) 以下、統計的データは、*Gemeinde-Verzeichnis für das Königreich Bayern, nach den endgültigen Ergebnissen der Volkszählung vom 1. Dezember 1905 (Beiträge zur Statistik des Königreichs Bayern, Heft 68)*, München 1906.
- (3) 以下、ヴェルフェルの伝記的データは、主として、Elmar Kerner, Pfarrer Johann Wölfel — eine Kurzbiographie, in: *Ebinger Kriegschronik*, S. 12ff.
- (4) *Ebinger Kriegschronik*, S. 27f.
- (5) ここで、両ゲマインデに関する基礎的データを、Wilh. Götz, *Geographisches Handbuch von Bayern*, Bd. 2, München 1898 に従って記しておく。
ランゲンゼンデルバハ村：人口 933 名，総面積 1,274 ha，耕地・園地 642 ha，採草地 247 ha，放牧地ほか 34 ha，林地 235 ha，宅地・道路ほか 116 ha
エービング町：人口 581 名，総面積 564 ha，耕地・園地 370 ha，採草地 111 ha，放牧地ほか 15 ha，林地 12 ha，宅地・道路ほか 56 ha
前者が全体としておよそ 2 倍にあたるが，林地面積が圧倒的に多いことが注目される。
- (6) 三宅立「日記の中の第一次世界大戦——バイエルンのカトリック農村から——」『明治大学人文科学研究所紀要』63 冊(2008 年 3 月刊行予定)
- (7) 同「〈戦争の神話化〉〈戦争の記憶〉——ドイツ少女の第一次世界大戦日記を手がかりに——」『駿台史学』127 号(2006 年)。
- (8) Josef Urban, Ein Wort zuvor, in: *Ebinger Kriegschronik*, S. 8.
- (9) *Ibid.*, S. 9.
- (10) Alois Natterer, *Der bayerische Klerus in der Zeit dreier Revolutionen 1918-1933-1945. 25 Jahre Klerusverband 1920-1945*, München 1946, S. 15ff., 23ff., 29ff.
- (11) Karl-Ludwig Ay, *Die Entstehung einer Revolution. Die Volksstimmung in Bayern während*

des Ersten Weltkrieges, Berlin 1968, S. 158.

- (12) 七首伝説については、三宅「〈戦争の神話化〉〈戦争の記憶〉」参照。なお、七首伝説の形成史について、アイは、次の事実に「七首の一突き (Dolchstoß)」のいわば初出を認めている。ベルリンの保守系紙『ポスト』は、すでに1915年に平和主義批判の記事「背後からの発砲 (Schüsse in den Rücken)」の中で、「ドイツの思想のために闘っている我らが戦士の背中への七首の突き刺し (Dolchstiche)」という言葉を用いており、それを取り上げたバイエルン陸相フォン・クレスの1915年11月2日付覚書は、バイエルンとドイツ帝国のほとんどすべての重要部署から注文されたという。Ay, *Entstehung*, S. 81.
- (13) Benjamin Ziemann, *Front und Heimat. Ländliche Kriegserfahrungen im südlichen Bayern 1914-1923*, Essen 1997, S. 306.
- (14) 1889年以降バイエルン民衆学校教員協会会長の地位にあった Joh. Bapt. Schubert を指すと推定される。Christian Weinlein, *Der Bayerische Volksschullehrer=Verein. Die Geschichte seiner ersten 50 Jahre: 1861-1911*, Nürnberg 1911, S. 308.
- (15) ヴェルフェルによれば、ホルヒャーは、農民ではあったが、農作業の友ではなく、鞣革用の櫛の樹皮の商いで富をなした。1871年におけるエービング聖堂区の創設、マイン川の鉄橋の建設、鉄道駅の設置、駅までのポプラ並木道の敷設などに、先頭に立って貢献した。十四人聖人修道院への毎年の巡礼を催し、丘の上に聖アントニウスの礼拝堂を建て、教会や畑の中の礼拝堂の維持に多額の献金をした。政治的・宗教的問題や農民に関わる諸問題を扱うあらゆる集会でその姿を見ることができた (115ff.)。
- (16) これは、10月下旬におけるルーデンドルフの動きに関するうわさの一つであろうか。
- (17) この前後、どこからか、11月14日以後に記述された年代記となっているはずだが、それがどこかは確認できない。
- (18) Wilhelm Mattes, *Die bayerischen Bauernräte. Eine soziologische und historische Untersuchung über bäuerliche Politik*, Stuttgart/Berlin 1921, S. 63.
- (19) バイエルン国民党は、当初キリスト教の新旧両派の分裂を克服することを志向したが、結局、純カトリック政党に回帰することとなった。Richard Keßler, *Heinrich Held als Parlamentarier. Eine Teilbiographie 1868-1924*, Berlin 1971, S. 328.